

陽徳遺跡・平ラ I 遺跡

(YOUTOKU·HIRAI)

—一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11—



995年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって、必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当安来道路においても道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成5年度から6年度にかけて実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成7年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 水上幹之

序

島根県教育委員会では、中国地方建設局の委託を受けて、平成元年度から一般国道9号（安来道路）建設予定地内遺跡の発掘調査を行っております。昨年度からは安来市島田町～吉佐町（1～1区間）の調査に入りました。この報告書は昨年度に実施しました平ラⅠ遺跡（安来市吉佐町）、本年度に実施しました陽徳遺跡（安来市門生町）の調査結果をとりまとめたものです。

安来道路の建設が進められています安来平野一帯は、古来より文化の栄えた地域であり、多くの遺跡が確認されております。今回調査を実施しました平ラⅠ遺跡では弥生時代から近世までのさまざまな時代の遺物が出上しました。また、高い山の頂上にある陽徳遺跡では弥生時代後期の集落や古墳時代前期の古墳、平安時代の建物や溝が見つかり、当時の人々の生活様式や古代の安来地方における社会の様子を探る貴重な資料となりました。

本報告書が多少なりとも安来平野周辺の歴史を解明する契機となり、また、広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高める上で役立てば幸いです。

本書を刊行するにあたり、調査にご協力いただきました地域住民の方々や建設省中国地方建設局松江国道事務所をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

島根県教育委員会

教育長 今岡義治

例　　言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が1993年度（平成5年度）と1994年度（平成6年度）に実施した、一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2. 本書で扱う遺跡は安来市門生町に所在する陽徳遺跡及び吉佐町に所在する平ラⅠ遺跡である。

3. 調査組織は次の通りである。

調査主体　島根県教育委員会

事務局　文化課　広沢卓嗣（課長），山根成二（5年度課長補佐），野村純一（6年度課長補佐），埋蔵文化財センター　勝部昭（センター長），久家儀夫（5年度課長補佐），佐伯善治（6年度課長補佐），T.藤直樹（同企画調整係主事），田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　斎藤勉（埋蔵文化財調査センター教諭兼文化財保護主事），大本公良（同教諭兼文化財保護主事），丹羽野裕（同文化財保護主事），池淵俊一（同主事），錦田剛志（同主事），深田浩（同主事），原昌徳（同臨時職員）

調査指導　山本清（島根県文化財保護審議会会長），池田満雄（同委員），田中義昭（島根大学法文学部教授），渡辺貞幸（同教授），都出比呂志（大阪大学文学部教授）

遺物整理　青戸房子，末海順子，佐伯明了，佐々木順子，陶山佳代，高橋啓子，野坂栄子，野中洋子，三木康江

4. 遺物の尖端は調査員の他，岩橋孝典（埋蔵文化財調査センター主事），椿真治（同主事）が行った。また写真は岩橋孝典が撮影した。また現地調査及び報告書作成作業においては，角矢永嗣（羽須美村教育委員会）の参加を得た。

5. 発掘作業（発掘作業員雇用等）については、島根県教育委員会から山口中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人　中国建設弘済会島根支部　布村幹夫（現場事務所長），吉岡勇治（技術員），勝部達也（技術員），中村弘己（技術員），原博昭（技術員），与倉明子（事務員），松本佳子（事務員）

6. 掘図中の方位は、国土調査法による第3座標系の軸方位である。

7. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

8. 本書で使用した遺構記号は次の通りである。

SB…振立柱建物跡，SD…溝状遺構，SI…堅穴住居跡，SK…土壙，SR…自然流路

9. 掘図の縮尺は図中に明示した。

10. 本書の執筆編集は、調査員が協議分担して行った。それぞれの分担は日次に明記した。

11. 所載遺跡の出土遺物及び実測図，写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

第1章 調査に至る経緯	(ト部吉博)	1
第2章 位 置 と 環 境	(丹羽野裕)	2
第3章 陽 徳 遺 跡		3
第1節 調査の概要と経過	(丹羽野裕)	3
第2節 I区の調査	(大本公良, 丹羽野裕, 深田 浩)	4
第3節 II区の調査	(池淵俊一)	22
第4節 小 結	(池淵俊一, 丹羽野裕, 深田 浩)	27
第4章 平 ラ I 遺 跡	(丹羽野裕)	36
第1節 調査の概要と経過		36
第2節 造構と遺物		36
第3節 小 結		48
第5章 自然科学的分析		49
陽徳跡焼土の地磁気年代	鳥根大学理学部 時枝克安	49
	鳥根職業能力開発短期大学校 伊藤晴明	

図 版 目 次

陽 徳 遺 跡	図版 1～図版22
平 ラ I 遺 跡	図版23～図版27

第1章 調査に至る経緯

昭和47年5月26日付で、建設省松江国道工事事務所から島根県教育委員会に「国道9号バイパス」建設の基本設計資料として、島根県境の安来市吉佐町から松江市乃至白町までの30.3kmにおける埋蔵文化財の有無について照会があった。そこで、県教育委員会では、地元教育委員会の協力を得て、昭和47年、48年に遺跡の分布調査を実施した。これらの調査結果を踏まえ、建設省からルート案が提示され、昭和48年7月には松江市東地区の予定ルートにかかる遺跡の取り扱いについて協議があった。

昭和49年7月には安来地区的折坂～月坂間のルート案について協議があった。つづいて昭和50年1月22日付で県教育委員会と松江東地区と安来地区的うち清水～月坂間の一部について発掘調査の依頼があった。これを受けて、昭和50年7月には建設省と契約を取り交わし、昭和50年度、松江市竹矢町才ノ峠古墳群、同矢出町平所遺跡、安来市早田町大坪占墳群の発掘調査を、昭和51年度には松江市平所遺跡の関連再調査、東出雲町出雲郷布敷遺跡の試掘調査を実施した。平所遺跡では、埴輪駕跡から馬、鹿、家、人物などの形象埴輪が出土し、52年6月には国の重要文化財に指定された。

昭和55年度・56年度には、昭和57年に開催が決定していた「くにびき」国体の主要幹線道路となる「松江東バイパス」（以前は「米松バイパス」と呼ばれていた）東出雲町山雲郷から松江市吉原町に至る5.4km間の7遺跡（東出雲町の春日遺跡、布敷遺跡、松江市の布田遺跡、中竹矢遺跡、才ノ峠遺跡、勝負遺跡、石台遺跡）のうち2車線分を緊急に調査した。

その後「松江バイパス」は高規格道路に設計変更され「松江道路」となり、昭和60年に建設省から前回調査した7遺跡の残り4車線分の調査依頼があった。調査は昭和61年度から平成3年度まで、順次行った。

昭和61年度には安来市鳥田町から同赤江町に至る延長6.9kmが「安来バイパス」として事業化されたが、昭和63年度には高規格道路に計画変更され、「松江道路」につなぐ東出雲町出雲郷から安来市吉佐町間の18.7kmの「安来道路」として実施されることになった。この計画変更で、予定ルートにも変更が生じたため、昭和62年度・63年度に再度分布調査を実施した。発掘調査はまず、安来市赤江町から島田町に至る6.9km（インターチェンジ部を含む）で平成元年度から同4年度まで7遺跡（安来市宮内町宮内遺跡、佐久保町大原遺跡、同門口クリ遺跡、同岩屋口遺跡、黒井町越峰遺跡、同才ノ神遺跡、島田町島田南遺跡）で実施した。

さらに平成5年度からは安来市荒島町から東出雲町出雲郷間を「安来道路西地区」として、さらに平成5年度からは安来市吉佐町から島田町間の3.9kmを「安来道路東地区」として引き続き調査を行った。そのうち安来道路東地区では、平成5年度は吉佐町の石田遺跡、カンボウ遺跡、国古遺跡、平ラⅠ遺跡、平ラⅡ遺跡と島田町の島田黒谷Ⅰ遺跡、島田黒谷Ⅱ遺跡、島田黒谷Ⅲ遺跡、普請場遺跡、明了谷遺跡の調査を行い、平成6年度には吉佐町の石田遺跡、五反田遺跡、徳見津遺跡、日廻遺跡、山ノ神遺跡、門生町の門生黒谷Ⅰ遺跡、門生黒谷Ⅱ遺跡、門生黒谷Ⅲ遺跡、陽徳遺跡、陽徳寺遺跡、岩屋口北遺跡の調査を行った。

第2章 位置と環境

陽徳遺跡は島根県安来市門生町、平ラⅠ遺跡は安来市吉佐町に所在する。いずれも安来市街の東側、すなわち島根県の東端、鳥取県境に近い位置になる。安来市東側は、中海に面し、比較的高い山が中海に迫っている。その山間に狭い谷があり込む地形を呈しており、可耕地となる平地の面積は大きくない。現在中海にせりだすように広がる平地はいずれも干拓地である。奈良時代に編纂された「出雲國風土記」の記載を見ると、やはりこの地形に制約されてか東西3kmに満たない間であるのに吉佐町⁽¹⁾は屋代郷、門生町は樋縫郷と、違う郷に属していたようである。

陽徳遺跡は、吉佐町と門生町の境界となる標高約80mの山の上に存し、中海方面の眺望は際だったものがある。近辺には古墳時代前期末の五反田古墳群や前方後円墳である陽徳古墳、山根古墳、また出雲地方でも古式の須恵器を焼いた高畠古窯跡群や山根古窯跡がある。また門生黒谷Ⅲ遺跡では、弥生時代後期の集落が、門生黒谷Ⅱ遺跡では古墳時代の集落が検出されている。

平ラⅠ遺跡は、狭い谷の奥の緩斜面に位置し、装飾壁画のある石棺を蔵す穴神横穴墓はすぐ東側の丘陵斜面にある。やはり東の丘陵にある平ラⅡ遺跡では、古墳時代前期の箱式石棺をもつ古墳や、5～7世紀の住居跡も検出されている。さらに東の石田遺跡、カンボウ遺跡では、弥生時代後期や古墳時代後期の集落があった。西側にそびえる丘陵を越えた谷には、弥生時代から奈良時代の集落がある山の神遺跡、徳見津遺跡、五反田遺跡などがあり、7世紀頃の鍛冶集落も検出されている。この五反田遺跡は陽徳遺跡のすぐ東に降りた地点でもある。

以上のような遺跡のあり方から、この地域は弥生時代後期以降集落が展開し、特に古墳時代後期以降に遺跡が増える傾向がうかがえる。

註

(1) 加藤義成「修訂 出雲國風土記參究」1957



第1図 陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡の位置と周辺の遺跡

第3章 陽徳遺跡

第1節 調査の経過と概要

陽徳遺跡は、安来市門生町と吉佐町の境にそびえる標高約80mの丘陵の頂上に位置する。中海の汀線から僅かの距離にもかかわらず、非常に高い丘陵で、少なくとも北、東、西側は一望できる立地である。特に現在の米子市から安来市島田町にかけて入り込む湾（現在その大部分は干陸されて安来干拓地となっている。）とさらに向こうの日本海を眼下に一望できる。

陽徳遺跡は、まず昭和63年度の分布調査で、頂上部に平坦な地形が認められることから、その立地を鑑みて土壙墓等の可能性があると判断された。平成6年度の調査では、まず試掘調査を行ったところ、頂上部（I区）で若干のピットと土師器碗の出土をみたため、そのまま継続して本調査を行った。

頂上I区はまず北側の平坦面の精査を行ったところ、建物跡と思われる柱穴群と須恵器、土師器を検出し、その立地から平安時代の祭祀的な建物の存在が想定された。一方頂上北端からは予想に反して弥生時代の後期末の竪穴住居跡が検出され、出雲地方で初の「高地性集落」である可能性が考えられた。そこで調査区を頂上部全域に拡大したところ、弥生時代の竪穴住居跡5棟、平安期と想定される建物跡3棟以上、平安期及び時期不明の土壙（壁が焼けたものを含む。）が10基検出された。

また頂上から北及び東側に延びる尾根上の比較的平坦な部分も調査を行った。北側の尾根上の調査区（II区）は、果樹園造成による攪乱が著しかったが、古墳時代前期の壺棺2基をもつ古墳が辛うじて検出された。東側の尾根上調査区（III区）では、当初溝状の落ち込みが検出されたものの、遺物等は全く検出されず、その形状からも自然の流路等によるものと判断された。

調査は平成6年4月から行い、同年12月に終了した。

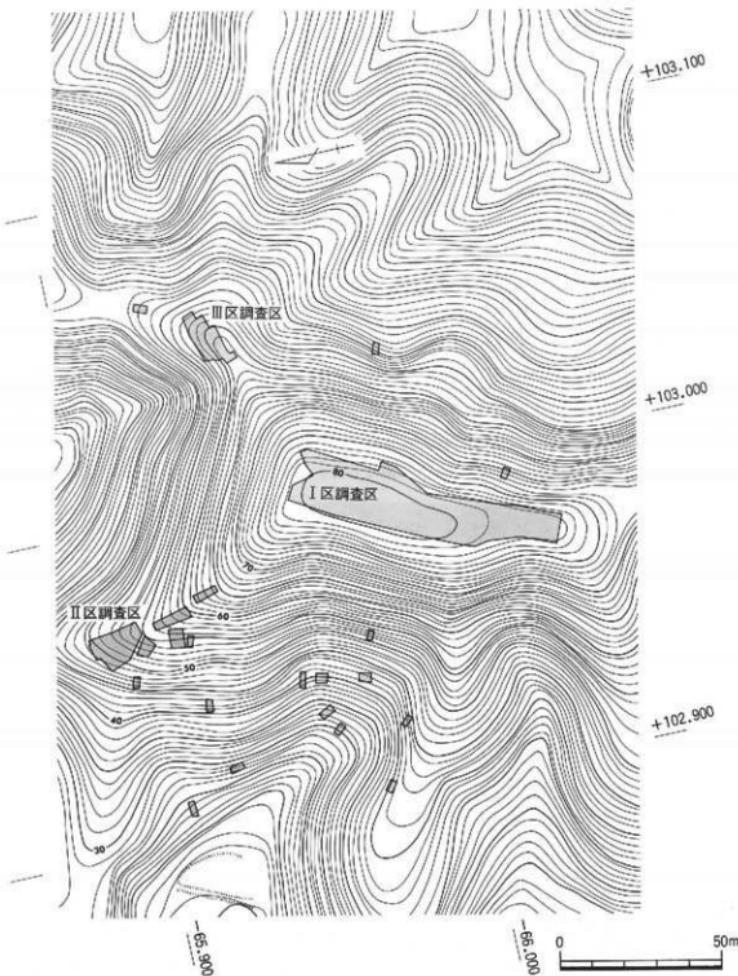


陽徳遺跡と眼前に広がる風景

第2節 I区の調査

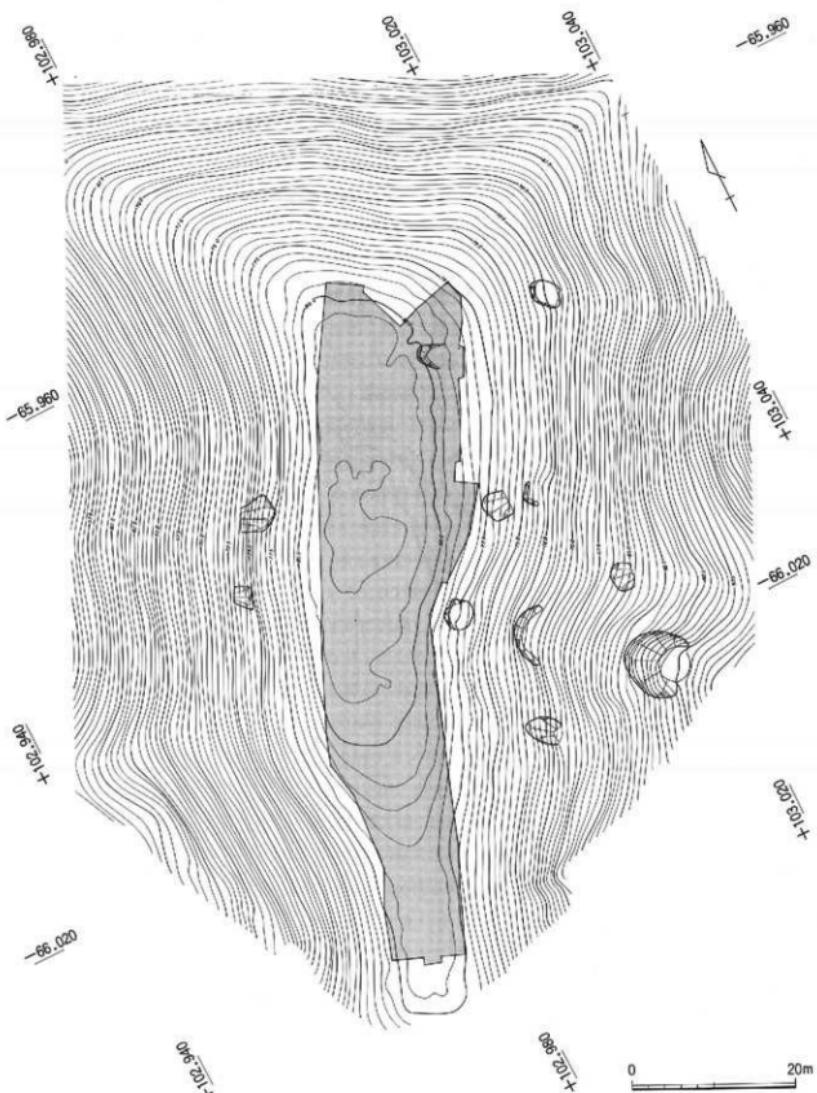
I区は、標高約80mの山の頂上部である。頂上は南北に細長い平坦面をもつが、斜面は極めて急峻で、特に東西の斜面は平坦面の際から急激に落ち込み、いわゆる屏風状を呈している。

I区は、明確ではないものの北側の頂上平坦面と、僅かに下がった南側の一段低い面とに分かれて

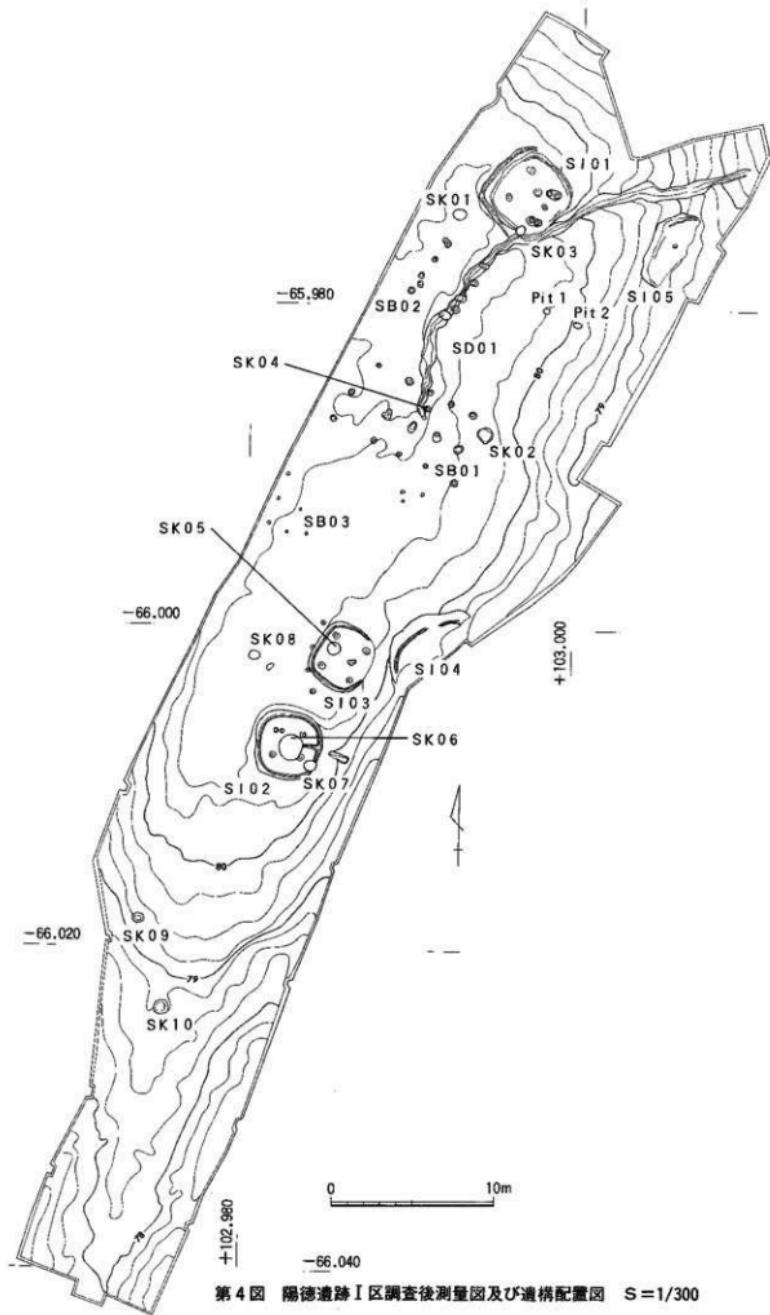


第2図 陽徳遺跡調査前測量図、調査区配置図 S=1/1500

おり、造構の大部分は北側頂上面から検出されている。頂上面は、長さ約50m、幅約15mの範囲で平坦面が広がる。弥生時代後期の竪穴住居跡は、この面の北端付近で2棟、離れて南端付近で3棟検出



第3図 陽徳遺跡Ⅰ区調査前測量図・調査区配置図



第4図 陽徳遺跡I区調査後測量図及び遺構配図 S=1/300

された。検出順にSI01～SI05と名付けた。この面の中央付近には、掘立柱建物跡を構成する柱穴群が集中し、方向性の一致する建物が少なくとも3棟が立っていたものと考えられる(SB01～SB03)。またこの建物群付近から、竪穴住居跡(SI01)をかすめて調査区北東端に向かって細くて深い溝(SD01)が延びている。一方平坦面全体にわたって8基の土壙が検出されている。

南側の面は、北側頂上面から約5～6m下った位置にあり、長さ約18m、幅約10mの範囲が平坦面となっている。土壙が2基検出されたのみである。なお土壙のうち、壁の焼けているSK06とSK10は、熱残留地磁気の測定を行った。以下、竪穴住居跡、土壙、溝状遺構、掘立柱建物跡の順に記載していく。

竪穴住居跡

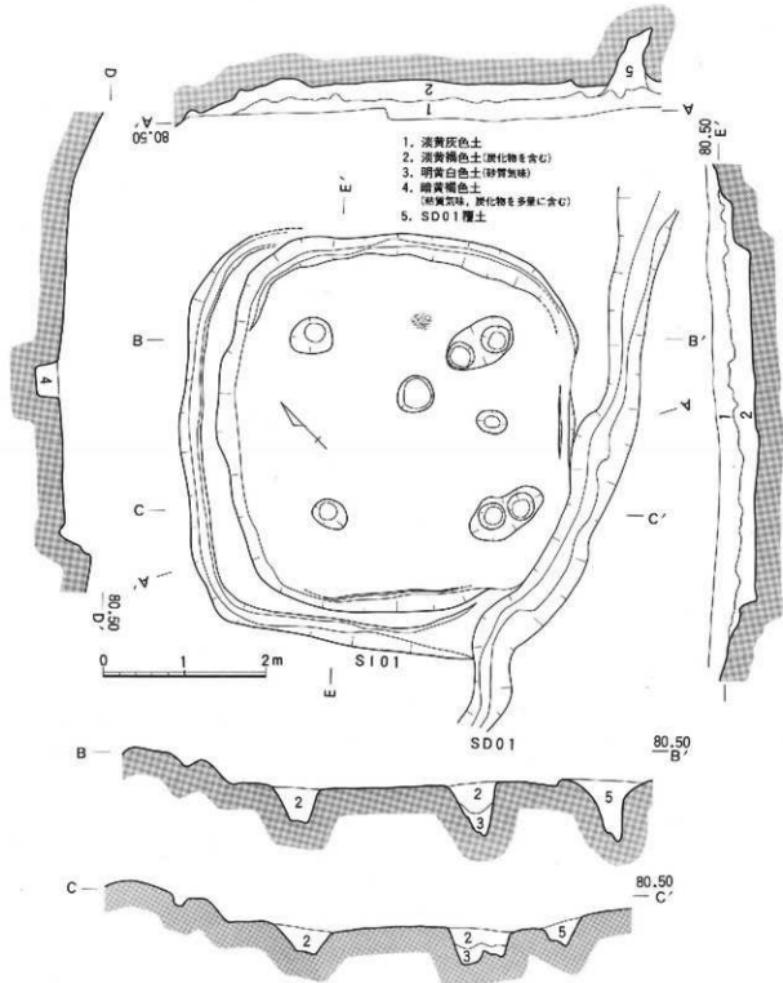
SI01(第5図) 1区山頂平坦面から検出され、竪穴住居跡の中で最も北西端に位置する。安山岩の地山を約50cm掘り込み平坦な床面を作っている。幅15cm程度の壁体溝が床面をほぼ1周巡っているが南側は後の時期に溝が掘り込まれたために壁面も削られている。一辺が掘り方で4.5m、床面4m程度の隅丸方形の竪穴住居跡である。床面には深さ40m程度の柱穴を4ヶ所で検出し、ほぼ中央に位置したところには炭化物が混在したピットを確認した。また、東側および南側に位置する柱穴は2穴ずつ僅かにずれて検出された。また床面の東側には赤褐色に焼上化した面を確認した。北西側には床面より45cm程度の高さの所にもう1つの床面を僅かに残している。加えて東側および南側に位置する柱穴が2穴ずつ存在することから建て替えの痕跡を認めることができる。現状から判断すると、初めに建っていた住居を東にすらす形でさらに床面を掘り込んで建て替えたものと考えられる。SI01(古)については掘り方で一辺5.2mでSI01(新)に比べるとやや規模が大きい。壁体溝は幅20cm、深さ15cm程度で北西面から南西面にめぐっている。住居跡の覆土からは砥石が1点出土している。角柱状の形態を呈し、よく使われて使用面はわずかに湾曲している。

SI01では遺構に伴う遺物が検出できなかったため、時期については明確に判断することはできないが、他の住居跡との関連および住居の形態から弥生時代後期のものと考えられる。

SI02(第6図) 1区調査区の中央よりやや南西に位置する竪穴住居跡である。住居の掘り方は南北4.5m、東西4mで円形に近い隅丸方形プランである。壁面は東側が緩い斜面になっているため、流出しており、高さ40cmしか残存していないが、西側の壁面は垂直に近く立ち上がり、現状で高さ80cm程度を測る。床面の隅には幅15～20cm、深さ10～15cmの壁体溝がめぐっているが貼床の痕跡は認められなかった。直径30～40cm、深さ40cm程度の柱穴状のピットを5穴検出したが、北西側に位置する柱穴がとなりあっていることから建て替えの可能性も考えられるが明確な根拠を確認するには至らなかった。また、床面中央部には1m四方の焼土を伴う土壙が検出された(SK06)が、これは後後に住居跡の覆土上から掘り込み、床面以下のレベルまで達したものであり、SI02と時期を同じくするものではない。

床面中央付近から東方向へ幅20cm深さ10cm程度の床溝があり、壁体溝まで続いている。この溝は壁にぶつかってトンネル状に暗渠となり、さらに住居跡外に続き、東に約120cm延びて地山斜面に口が開いていた。外溝の埋土は2層で構成されており下層から淡黄褐色粘質土、淡茶褐色粘質土が堆積していた。床面中央部より住居外に溝が延びる他の例から判断してこの床面に中央付近にもピットがあっ

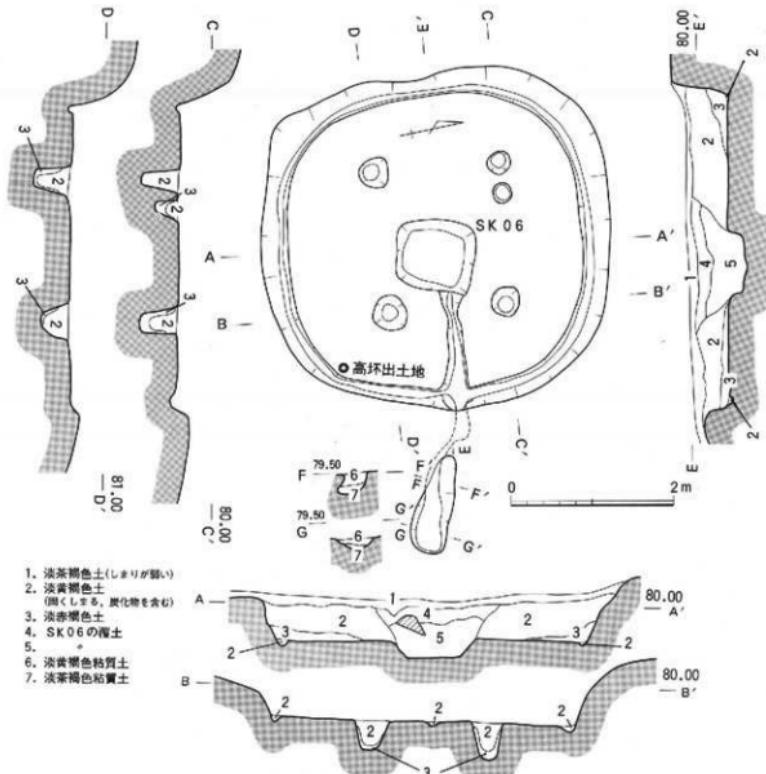
たと推定されるが、前述したように現状では後世の土壤に切られて確認できなかった。現状から判断すると外溝が斜面に向かって下り粘質土が堆積していることから排水溝の機能を果たした溝と考えられるが、中央ピットが炉としての性格を持つものであるならば、送風効果をもたらすものであった可能性も否定できない。床面中央部より床溝が暗渠を作つて外溝に達する類例としては岡山県津山市押入西遺跡⁽¹⁾、同県勝央町小中遺跡⁽²⁾が確認されている。また、松江市勝負遺跡⁽³⁾では暗渠は作らないが中央



第5図 陽徳遺跡I区S101実測図 S=1/60

ピットから住居外に溝が延びる例が検出されている。この住居が本遺跡のSI02と同時期のものであることは興味深い。第11図の4はSI02床面より出土した弥生土器高杯である。外面は淡黄褐色、内面淡暗褐色で、杯部の基底部しか残存せず、加えて劣化が著しいが弥生時代後期のものと考えられる。第12図5は覆土より出土した安山岩製変形球状石製品である。長径2.7cm、短径2.1cmで一部が欠けている。SI02は住居の形態、出土遺物から弥生時代後期前半のものと考えられる。

SI03（第7図） SI02の北側3m離れた隣、I区中央付近に位置する。東側壁面が流出によって一部が残存していないが、掘り方で東西3.8m、南北4.1mの隅丸方形を呈す竪穴住居である。流出した東側を除く床面には幅5~10cm、深さ10cm程度の壁体溝がめぐる。壁面は現状で70cmを測り比較的緩やかな傾斜で立ち上がる。床面上にピットを5穴を検出した。柱穴は四方に並び、いずれも直径で45cm、深さ40~50cm程度、主柱穴間の間隔は2mを測る。床面中央よりやや東によったところに、東西径60cm、南北径30cm、深さ20cmの炭化物を含む暗褐色土が堆積した椭円形ピットが検出された。

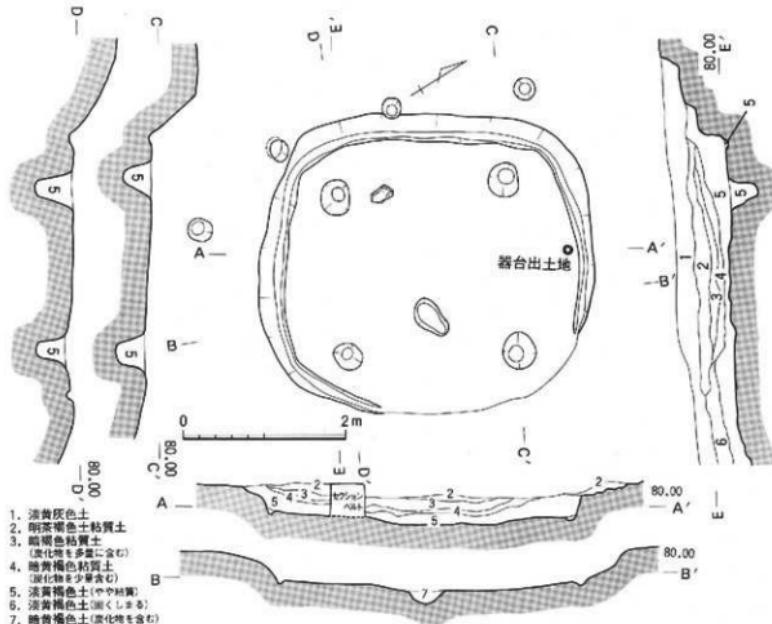


第6図 陽徳遺跡I区 SI02実測図 S=1/60

また、北西壁面および南西壁面の上部付近には4ヶ所にピットが検出された。これらのピットは、ほぼ1.5mの等間隔で配列しており、西隅面上のピットは住居の外方向にやや斜めに掘り込まれていることから、住居の外部側支柱用ピットの可能性がある。

SI03床面からは鼓形器台（第11図10）が出土した。外面ともに淡黄褐色で受部のみが残存し焼成は良好であるが、風化が著しく調整は不明である。全体の形状より推定して弥生時代後期末のものである。また床面西隅付近から台石（第12図3）が出土した。長軸25cm、短軸12cm、厚さ8cmを測り変形した六角形を呈している。面の中央部には擦痕が認められ、その裏面には2ヶ所に叩き痕が確認された。

第11図1～3はSI02の北側でSI03との間付近から出土した弥生土器である。1は口縁から肩部にかけて残存し、外面は赤褐色、内面は淡黄褐色で焼成は良好である。口縁は立ち上がりが短い複合口縁を呈し、稜は比較的シャープである。頸部にはヘラによる刺突文が、肩部には貝殻刺突文がみられる。口縁部外面はナデ調整が施されている。内面には頸部直下までヘラケズリがあり、外面は胴部にススが付着している。2も口縁部から肩部にかけて残存し外面は茶褐色、内面は黄褐色で焼成は良好である。肩部には不均等に配列した貝殻刺突文がみられる。口縁部の立ち上がりは短く複合口縁を呈し稜は比較的鋭い。口縁部外面にナデ調整が施され、内面肩部にはヘラケズリがみられる。3は口縁端部を欠き肩部にかけて残存しているが磨滅が著しい。口縁内部にナデ調整、肩部にヘラケズリが施



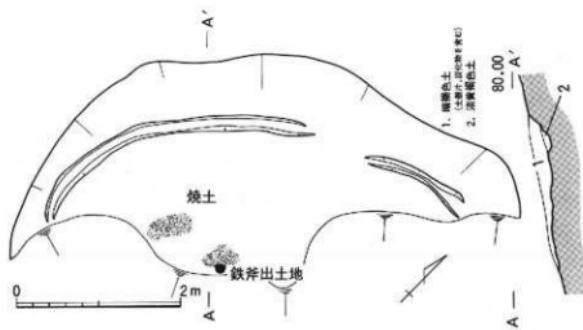
第7図 陽徳遺跡I区 SI03 実測図 S=1/60

されている。1～3は弥生時代後期前葉のものと考えられる。8, 9は弥生土器甕である。8は口縁先端部が欠落しているが複合口縁を呈し、外方に向かって立ち上がって、稜は横につまみ出されシャープであり、そのうえ

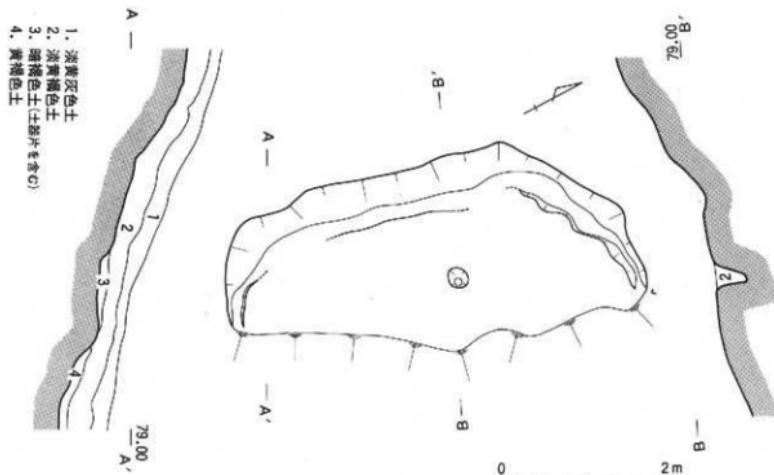
に2本の凹線が施されている。9も口縁端部を欠くが複合口縁を呈し、外面はヨコナデ、稜は斜め下方に突出している。内面は磨滅が著しく調整は不明である。8, 9ともに弥生時代後期末のものと考えられる。

SI04(第8図) I区中央付近の山頂平坦部東側の緩やかな傾斜から急傾斜に変わった位置に立地し、SI03の東に隣接している。斜面を削り平坦面を作りだしており、北東側から南東側にかけては流出して全く残存していない。全体的に残存状況が不良で壁面も明瞭ではなく、柱穴も検出できなかったが床面に壁体溝がめぐる痕跡が認められることから、一辺が4.5mを測る隅丸方形を呈する竪穴住居跡と考えられる。また中央付近および中央からやや西よりの位置から赤褐色の焼土が2ヶ所で確認できた。

第10図1は床面中央付近の焼土中から出土した袋状鉄斧である。平面形が縦長長方形を呈する小型



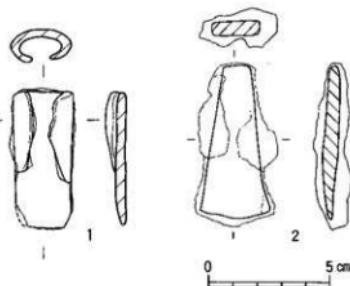
第8図 陽徳遺跡 SI04 実測図 S=1/60



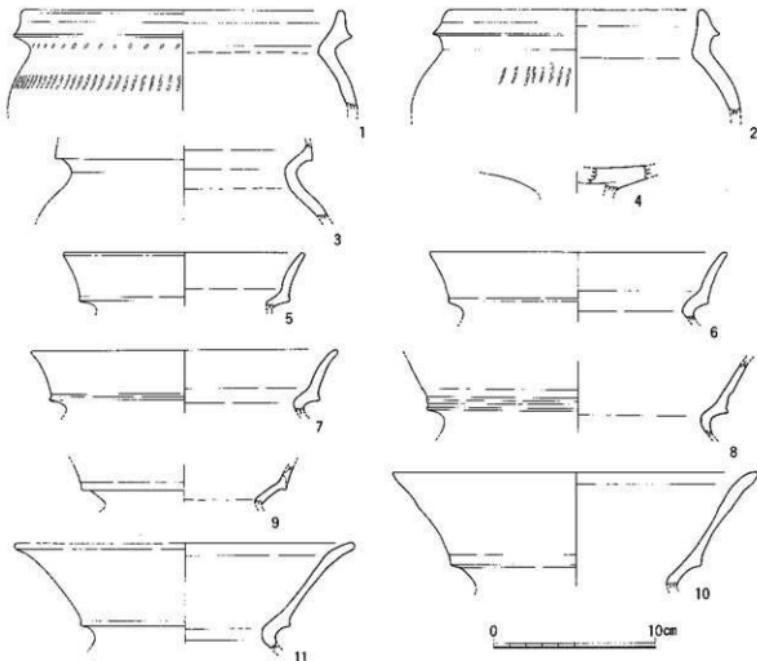
第9図 陽徳遺跡 I 区 SI05 実測図 S=1/60

の鉄斧で、全長5.7cm、刃部幅2.3cm、厚さ0.4cmを測る。刃部は一部欠損しているが直角で主軸にやや斜交しており断面両刃を呈す。袋部は冀部分を丸く折り曲げて成形しており接していない。第10図2はSI04周辺部から出土した鉄製品である。銹化が著しく明言はできないがおそらく板状鉄斧と思われる。平面バチ形を呈し長さ6.3cm、刃部幅2.8cm、厚さ約0.7cmを測る。刃部は丸みを帯び両刃である。川越哲志氏分類の板状鉄斧A2型に相当するものと思われる。

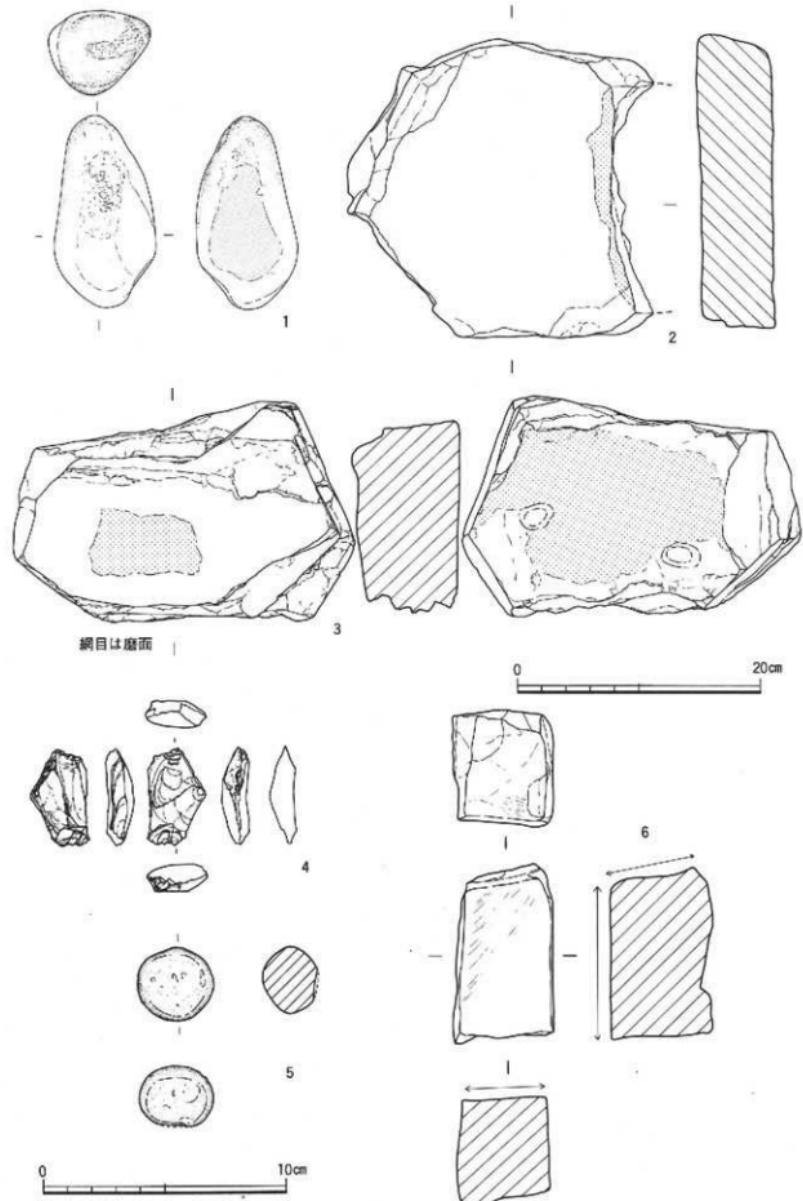
SI05（第9図）T区の北東側で、平坦部から1段低いテラス状の緩やかな斜面から急斜面に変わる地形に位置する。立地的にはSI04と似ており、緩やかな斜面を削りだして平坦面を作ったものと推定できるが、北東面から南東面にかけては流出によって残存していない。壁面も風化が激しく残存状況は不良である。壁体溝の痕跡を僅かに認めることができると、特に西壁体溝はほとんど形を留めていなかつた。現状から判断すると北隅から西隅辺4.5mを測



第10図 阳德遺跡I区出土鉄製品実測図
S=1/2 (1…SI04出土)



第11図 阳德遺跡I区堅穴住居跡内及びその周辺出土弥生土器実測図
(4…SI02, 10…SI03)



第12図 陽徳遺跡Ⅰ区出土石製品実測図 1~3……S=1/4, 4~6……S=1/2

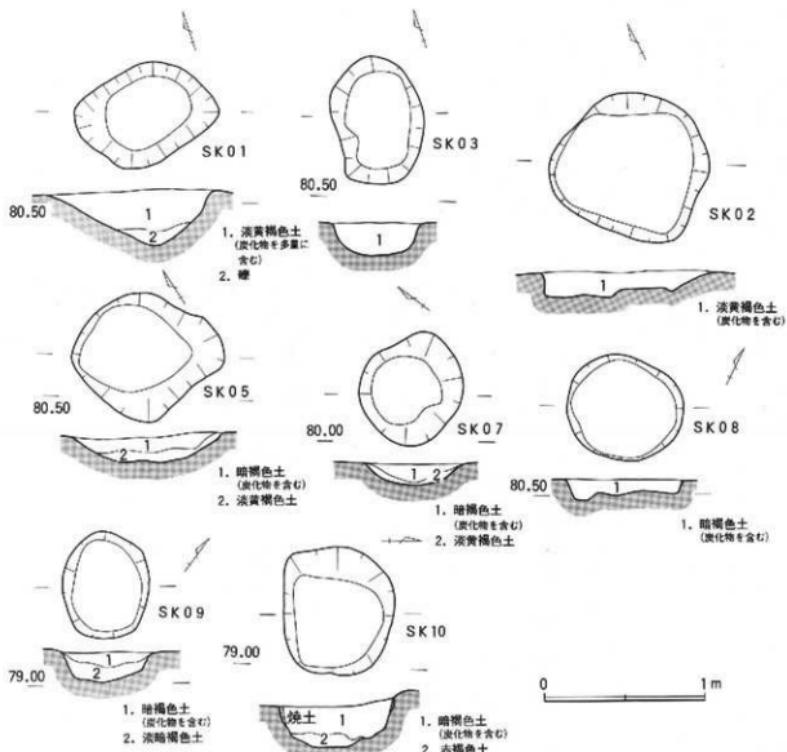
る隅丸方形を呈している堅穴住居と考えられる。床面は東半分しか残らないが、径30cm、深さ42cmのピットを1穴検出した。出土遺物がないため、時期については明確に判断することは難しいが住居の形態から弥生時代後期のものと考えられる。

その他の遺物

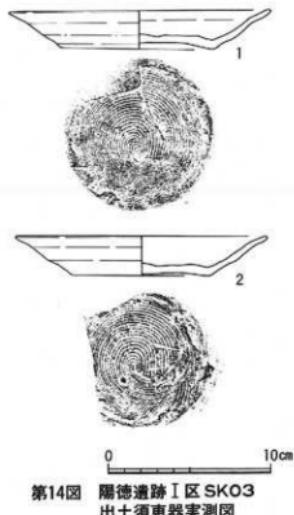
第11図5は東側斜面の中央付近から出土した弥生土器甕である。口縁部のみ残存しやや外方に向かって立ち上がり端部は丸く取られしており、ナデ調整が施されている。時期は弥生時代後期末である。

第11図11は弥生土器鼓形器台受け部である。筒部は太く、短い。受部は外反気味に開いている。時期は弥生時代後期末と考えられる。

第12図1は東側斜面より出土した敲石である。やや太い乳棒状を呈し、先端に何かを叩いた結果と考えられる敲打痕がみられる。広い一面にはすり減ってツルツルになった面もあり、磨石としても使用したことがうかがえる。2は東側斜面より出土した台石である。大形で平たい石の表面の端に擦っ



第13図 隅徳遺跡I区SKO 1~03, 05, 07~10実測図 S=1/30



第14図 陽徳遺跡Ⅰ区 SKO3
出土須恵器実測図

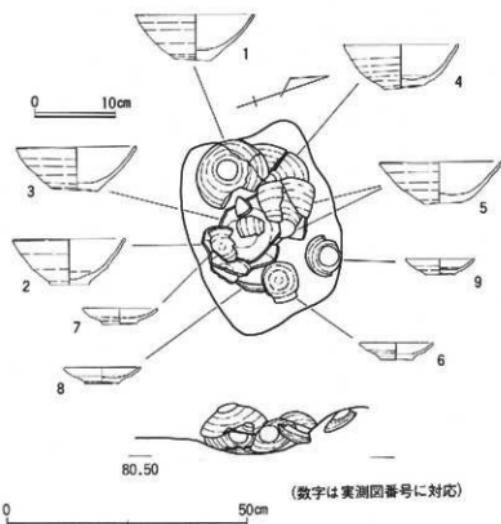
た面が僅かにみられるが、破損しておりもとはもっと広い擦り面であったと考えられる。

4は、頂上平坦面で出土した玉髓製の楔形石器である。素材は平坦打面からとられた横長の剥片で、上下方向に細かいながらも剝離面が認められる。また打面の縁辺にもつぶれ状の細かい剝離面があり、違う方向でも使用されたものかも知れない。

土 壤

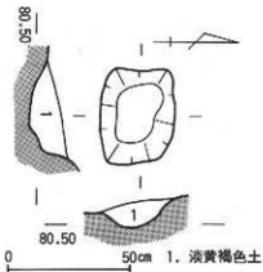
陽徳遺跡第I調査区では、調査区ほぼ全体から時期不明のものも含めて大小様々な形態の土壤が10基検出された。その内9基の土壤には多量の炭化物が詰まっており、周壁は焼けて赤変しているものも見られる。また、10数点の土師質土器が一括で出土した土壤も検出された。以下順に概要を追っていきたい。

SK01（第13図） SI01の北西約1mに検出された土壤である。長径90cm、短径60cmの梢円形を呈し、深さは35cmを測る。土壤内には多量の炭化物と角礫が堆積し、周壁には焼土がわずかに残っていた。何らかの目的で火を炊いたことは推測できるが、時期は不明である。

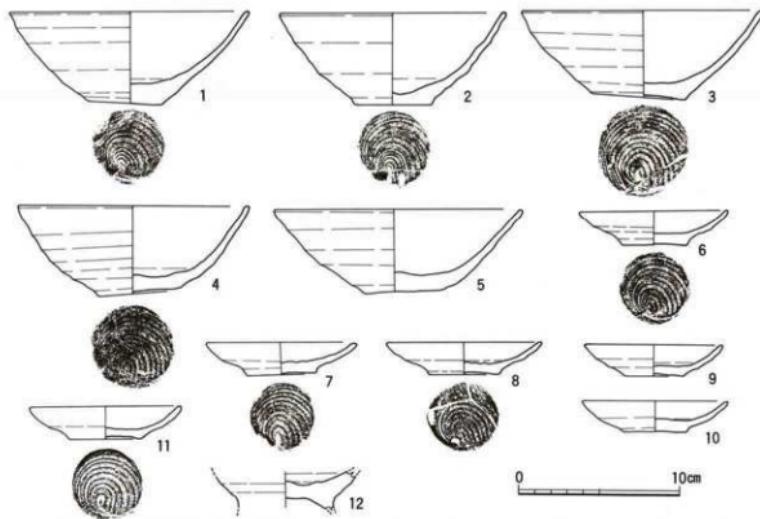


第15図 陽徳遺跡 SKO4 遺物出土状況 S=1/10

SK02（第13図） SB01東側付近で検出された。長径1m、短径90cm、深さ15cmを測り、底部が平坦な不正円形状の極浅い土壤である。SK01と同様に炭化物が詰まっており、時期は不明である。



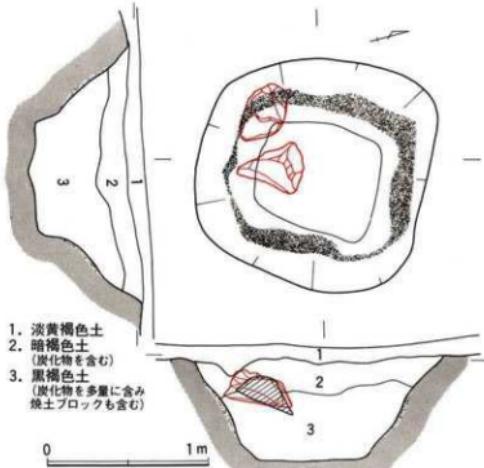
第16図 陽徳遺跡 SKO4 実測図
S=1/20



第17図 陽徳遺跡I区SKO4等出土土器 S=1/2 (1~10…SKO4, 11,12…SBO1周辺)

SK03 (第13図) SK01の東方約4m付近で検出された。SI01に重なっており、SI01が埋まってから掘り込まれた土壌である。長径80cm、短径55cmの橢円形状を呈し、深さは20cmを測る。多量の炭化物に混じって須恵器皿が2点検出された(第14図1・2)。1は口径15.8cm、高さ2.5cmを測る。2は口径15cm、高さ2.5cmを測る。两者とも広い底部をもち、口縁は外反しながら開く。焼成は軟質で、底部に回転糸切り痕が残る。以上の特徴よりこれらの遺物は9~10世紀前後のものと推定される。

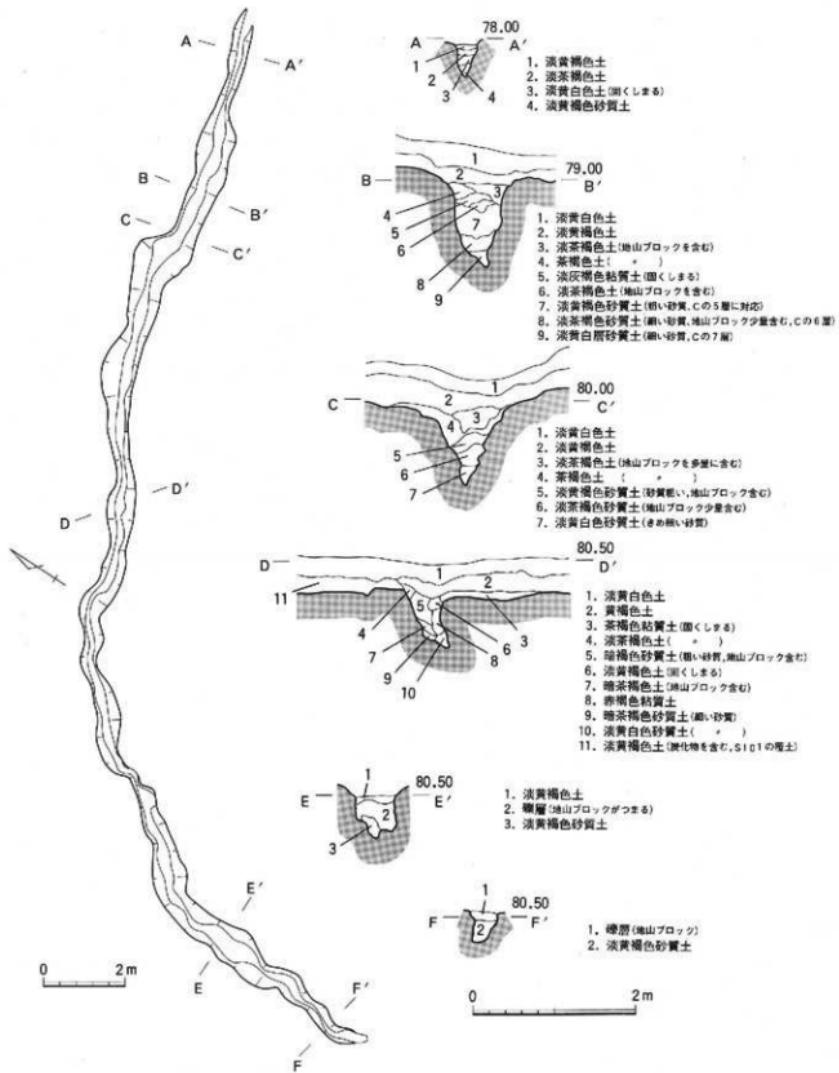
SK04 (第16図) SB01内及びSD01南端部付近より検出された。長径40cm、短径30cm、深さ10cm程度の小形土壌であるが、土壌内より土師質土器・壺、小皿が折り重なるように9個体出土し、これら以外にも掲載できなかった小破片が数点出土している(第17図1~10)。1~5は口径15cm前後、高さ5cm前後の壺で、底部には回転糸切り痕が残る。いずれも底部は小さく、体部は内湾しながら逆八の字状に開く形態をもつ。6~10



第18図 陽徳遺跡SKO6 実測図 S=1/30

は小皿で、いずれも口径 9 cm 前後、高さ 2 cm 前後を測り、底部から体部はやや内湾気味に立ち上がる。底部には回転糸切り痕が残る。これらの遺物の時期は 12 世紀代と推定される。

SK05 (第13図) SI03 に重なって検出された。SI03 が埋まってから掘り込まれている。長径 95cm,



短径80cm、深さ15cmの不正形土壙である。土壙内には炭化物を含んだ暗褐色土が堆積しているが、遺物は出土していない。

SK06 (第18図) SI02の中央付近に重なって検出された土壙で、SI02が埋まって後、SI02床面をも削り込んで作られた遺構である。調査区内では最大の土壙で、幅約140cm、深さ約70cm、底面は長径約75cm、短径約65cmを測る。底面は水平であり、断面は逆台形状を呈する。周壁には焼土が巡り、土壙内には炭化物や焼土ブロックを多量に含んだ黒褐色土が堆積しており、明らかに内部で火を炊いた痕跡がうかがえる。遺物は出土していないが、底面より高さ約40cm付近、ちょうど2層と3層の境目あたりで石が2点検出された。石はいずれも安山岩製で、特別加工された様子もなかった。この土壙の性格は現段階では追求できないが、時期については熱残留磁気測定を試みた結果、A.D. 660±30の測定値が示された（第5章参照）。

SK07 (第13図) SI06と同様、SI02が埋まった後、その南西端に作られた土壙である。長径70cm、短径65cm、深さ15cmの不正円形状を呈する。SK05と同様、炭化物を含んだ暗褐色土が堆積している。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

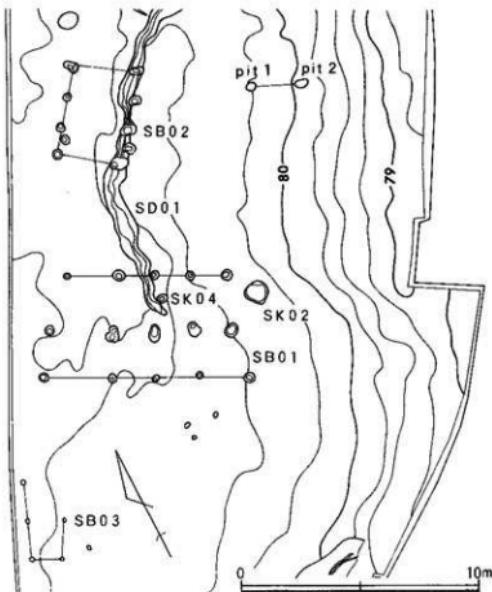
SK08 (第13図) SI03の西方約3m付近に検出された。長径75cm、短径65cm、底部は平坦で深さ15cm程度の円形の土壙である。炭化物を含んだ暗褐色土が堆積し、周壁には焼土が微かに残っている。遺物は出土していない。

SK09 (第13図) SI02の南西約12m付近に検出された。長径65cm、短径55cmの梢円形状の土壙で、深さは約20cmで炭化物を含んだ暗褐色土が堆積する。周壁には焼土が微かに残っている。遺物は出土していない。

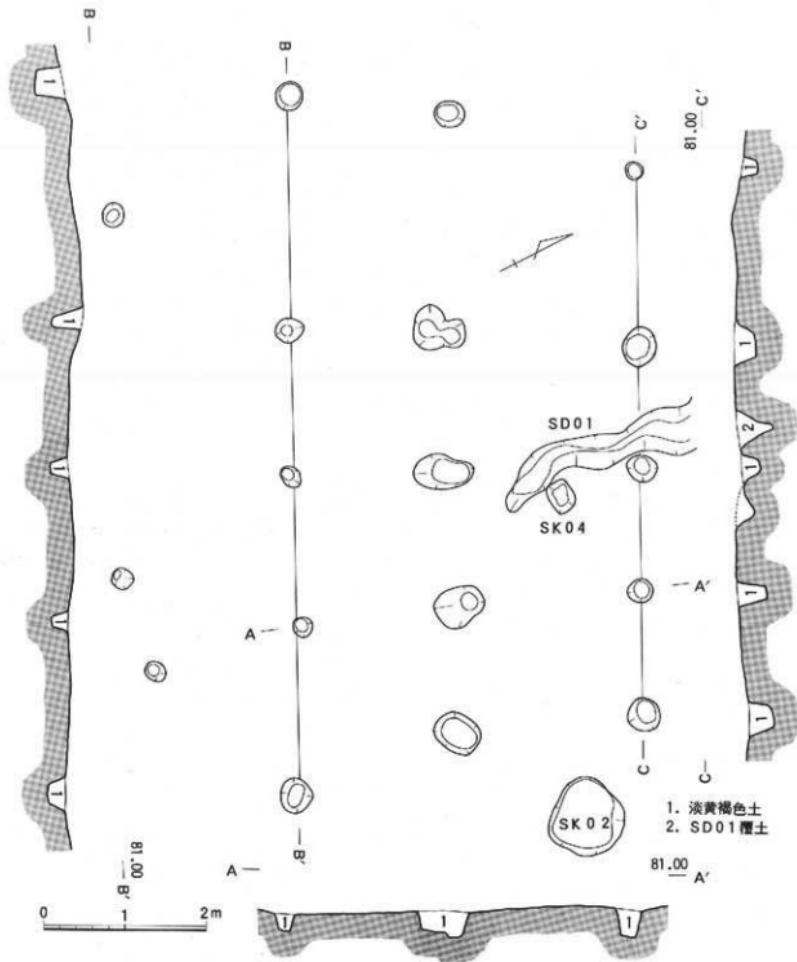
SK10 (第13図) SK09の南方約5m付近で検出され、調査区内の最南端に位置する。長径80cm、短径70cmの土壙で、深さは25cmを測る。炭化物を含んだ暗褐色土が堆積し、遺物は出土していない。周壁に焼土が比較的よく残っており熱残留磁気測定を試みたが、時期の特定はできなかった。

溝状遺構

第1調査区の中央部よりやや北よりの標高が最も高くなった付近より、北東方向の斜面にかけて溝状の落ち込みが検出された。その検出状況は自然の流路とは考え難



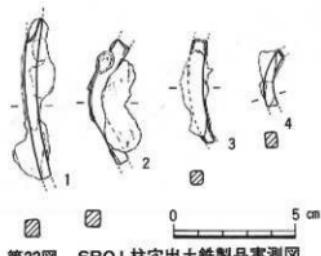
第20図 陽徳遺跡I区掘立柱建物配置図 S=1/200



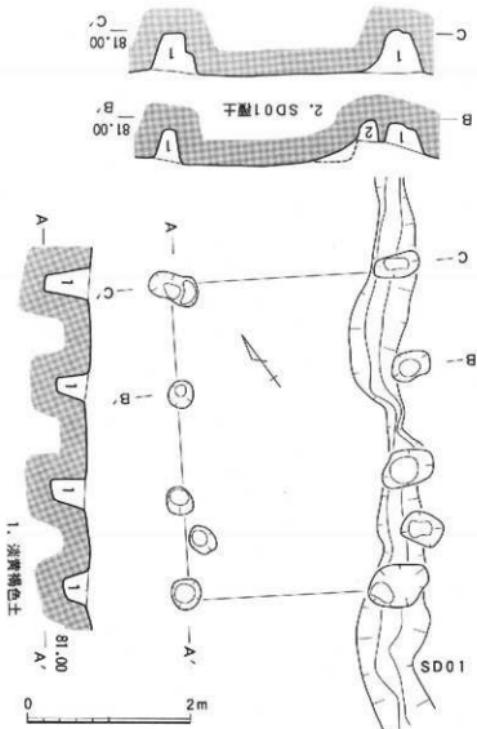
第21図 陽徳遺跡I区 SB01 実測図 S=1/60

く、人工的な遺構であると判断しSD01とした。以下、概要を追っていく。

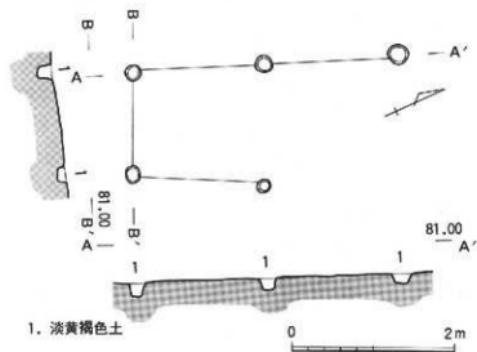
SD01 (第19図) SB01のほぼ中央部より北方に真っすぐのび、約5m進んだあたりでやや北東に折れ、SI01付近でさらに東側にうねり、そのままSI01を切って調査区北東方向の尾根上に連なる様相を呈し、その全長は14m以上を測る。幅は20~100cm、深さはSB群付近では50cm程度で、



第22図 SB01柱穴出土鉄製品実測図 S=1/2



第23図 阳徳遺跡I区SBO2実測図 S=1/60



第24図 阳徳遺跡I区SBO3実測図 S=1/60

れ柱間が異なっており、一見したところ独立したものとも思える。しかし周辺に対応する柱穴はないうえ、揃っていない柱間距離が一定の法則をもっており（西端の柱間が長く、他の柱間はほぼ同じ距

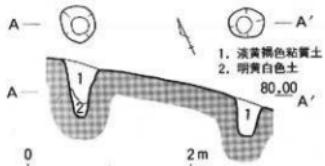
箱型に掘り込まれているが徐々に深くなり、SD01を過ぎた斜面付近では1m前後に達し、断面はV字状を呈する狭くて深くて長い溝である。土層をみると上層は礫が混じった粘質土が堆積しているが、下層にいくにしたがいきめの細かい砂質となる。水が流れていた痕跡にみうけられるが、意識的に流していたかについては明言できず、その性格についても一際不明である。

溝内底部より須恵器の小片が1点のみ出土している（第27図5）。小片で時期をうかがうのは難しいが、第I調査区北側斜面より溝内出土土器と同形態とみられる須恵器・高杯脚部（第27図4）が出土しており、SD01の時期については少なくとも7世紀以降の遺構とは推測できる。

掘立柱建物跡

頂上平坦面中央北寄りに、柱穴群が検出された。尾根に直交する形で最大のSB01があり、それにはば直交して尾根に平行にSB02、SB03が検出された。さらにSB02の東に2つのピットが建物群の方向に合わせて並んでいる。一定の距離を置き、一定の方向性の読み取れるこれらの遺構は相互に関連するものである可能性が強いと判断される（第20図）。

SB01（第21図）頂上平坦面のはば中央に、尾根に直行して横切るように並んだ柱穴群である。5穴のピットが一直線に並ぶ柱穴列が平行して3列並んでいる。これらの柱穴列は、それぞ



第25図 陽徳遺跡 Pit 1, 2 実測図
S=1/60

に異なる程度である。

なお、柱列のうち中央の3穴だけを取れば、さほど不自然ではない2間×2間の建物が復元できる。そう考えると、両側の柱穴は附属的なものと解釈することとなる。

中央の柱列の東から2番目の柱穴から鉄製品が出土している（第22図）。いずれの断面が方形で、僅かに湾曲している。断面の一辺はおよそ5～6mmを測る。鉄釘の可能性もあるが、丸みを帯びた形態の何らかの1個体が破損して別々になったものかもしれない。よって鉄製品の性格や時期は不明である。

建物内に前述したSD01とSK04が重なっているが、遺構同士の直接の関係はないため、前後関係は不明である。

SB02（第23図） SB01の北約4.5mの位置に、90°の角度からややふれた方向で3間×1間の掘立柱建物跡が検出された。建物の規模は、柱穴の中心を取って長軸が約3.9m、短軸が2.7～2.8mを測る。柱穴の規模はおよそ30～50cmで、柱間は1.2m前後を測る。

柱穴内から直接出土した遺物はないが、SB01付近から北に延びる細い溝（SD01）と柱穴が重なっている。柱穴は溝が埋まつてから掘り込まれており、明らかにSD01

離である。）さらに後述する他の建物と一定の方向性がうかがえることからも、一つの建物である可能性が高いものと考えられる。とすれば、いびつな台形に近い4間×2間の総柱建物となる。建物規模は、長軸の長辺（南辺）が約8.5m、短辺（北辺）が約6.7m、短軸が約4.2mを測る。柱穴は直径30～40cmのものが多く、概して小形である。柱列間の距離は、南側が約2.1m、北側が約2.2mを測り、僅かに異なる程度である。

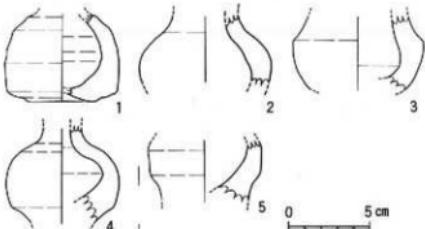
なお、柱列のうち中央の3穴だけを取れば、さほど不自然ではない2間×2間の建物が復元できる。そう考えると、両側の柱穴は附属的なものと解釈することとなる。

中央の柱列の東から2番目の柱穴から鉄製品が出土している（第22図）。いずれの断面が方形で、僅かに湾曲している。断面の一辺はおよそ5～6mmを測る。鉄釘の可能性もあるが、丸みを帯びた形態の何らかの1個体が破損して別々になったものかもしれない。よって鉄製品の性格や時期は不明である。

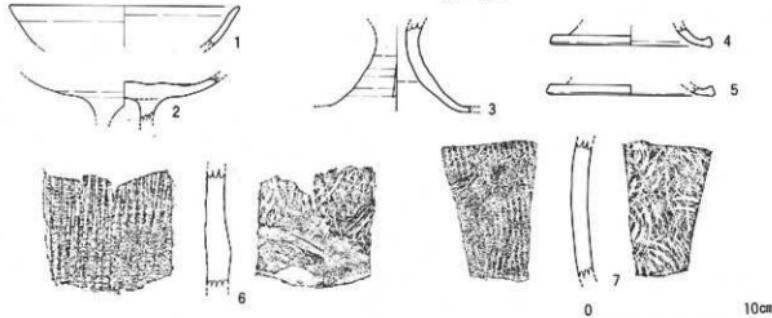
建物内に前述したSD01とSK04が重なっているが、遺構同士の直接の関係はないため、前後関係は不明である。

SB02（第23図） SB01の北約4.5mの位置に、90°の角度からややふれた方向で3間×1間の掘立柱建物跡が検出された。建物の規模は、柱穴の中心を取って長軸が約3.9m、短軸が2.7～2.8mを測る。柱穴の規模はおよそ30～50cmで、柱間は1.2m前後を測る。

柱穴内から直接出土した遺物はないが、SB01付近から北に延びる細い溝（SD01）と柱穴が重なっている。柱穴は溝が埋まつてから掘り込まれており、明らかにSD01



第26図 陽徳遺跡 I 区出土土器小壺実測図
S=1/3



第27図 陽徳遺跡 I 区出土須恵器実測図 S=1/3 (5…SD01)

より新しい遺構である。SB01は前述のように、7世紀代を中心とする時期と考えられることから、SB01は7世紀よりも新しい時期であることはいえる。

SB03（第24図） SB01の南約4mの位置に、SB01と長軸がおよそ90°の角度をふって建てられた小型の建物跡である。柱穴は5穴しか検出されなかったが、2間×1間の建物であったと推定している。規模は、長軸が約3.3m（柱間1.65m）、短軸が1.2mを測る。柱穴は直径約20cm前後と小形である。

柱穴内から遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SB02東側柱列（第25図） SB02の約4m東側、SB01の東端付近から約8m北東側で2個の柱穴（P1、2）が検出された。このふたつの柱穴は、直径が40cm前後で、ともに深くしっかりしている。柱間は約2mである。このふたつの柱穴の方向はSB01の長軸方向とほぼ一致しており、またその位置もSB01、SB02との規則性を感じさせるものがある。もし、これらの建物群と一体の遺構であるならば、門のような建物であった可能性もあるが、それを裏付ける証拠はない。柱穴内から遺物等は出土しておらず、時期は不明である。

遺構に伴わない遺物（須恵器、土師器）（第26図、27図） 第26図は、掘立柱建物跡の周辺から出土した上質質土器の小壺である。いずれも分厚い器壁で、白っぽい淡褐色を呈す。内面が黒色になるものもある。いずれも最大径が7~8cmと、ほぼ同大であるが、形態は微妙に異なっている。1は、不整ながらも平底であるが、3は丸底風、4、5は1度くびれてからさらに下方へ伸びていくようである。体部の形も一様ではない。

これらの子壺の性格については、まず古墳時代後期の須恵器子持壺の可能性を考えられる。比較的時期の下る退化した型式のものに似た例があるが、いずれも土師質のうえ、親壺への貼り付け痕らしきものが認められないなどの否定的要素もある。もう1つは、平安期の須恵器壺が小形仮器化したもの（⁽⁵⁾）の可能性がある。類例として、木次町妙見山遺跡から類似した壺が出土している。この妙見山遺跡は、本遺跡と同様に眺望の良い山上に立地しており、平安期を中心とした祭祀的意味あいが強いと考えられる建物跡や上塙が検出されている。この妙見山出土例と本例は形態や焼きの具合なども似ており、遺跡のとりまく状況も非常に近いことなどからも、本例は平安期のもの可能性が強いと考えている。

第27図は須恵器である。1から5は高杯で、5以外は建物群の東側の斜面で出土しており、1、2、4は同一個体の可能性もある。杯部は稜線のない椀形で、軸には切り込みが見られ、脚端は若干肥厚させている。大谷編年（⁽⁶⁾）の出雲5期～6期に対応するもので、7世紀代のものであろう。

6、7は須恵器甕の胸部破片である。ともに外面は平行タタキ、内面は同心円タタキ痕がある。時期の特定は難しいが、高杯に近い時期と考えられる。

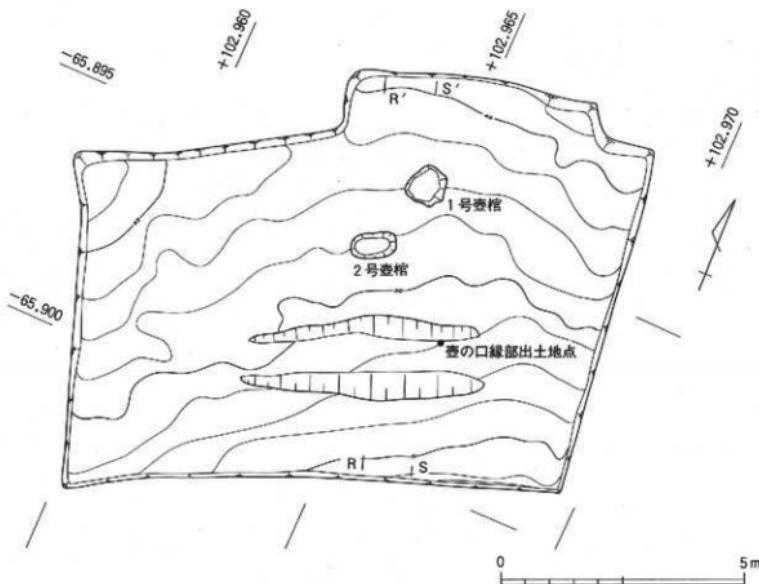
註

- (1) 岡山県文化財保護協会 1973『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』(1)
- (2) 岡山県教育委員会 1975『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』(4)
- (3) 広江耕史・藤井和久 1992『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書（勝負遺跡）』
Ⅹ 島根県教育委員会
- (4) 川越哲志 1993『弥生時代の鉄器文化』
- (5) 木次町教育委員会、坂本諭司氏のご好意により実見した。
- (6) 大谷晃二 1994『出雲地域の須恵器の編年と地域色』『島根考古学会誌』第11集

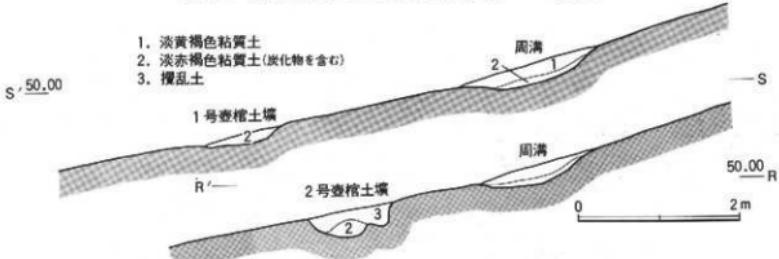
第3節 II区の調査

陽徳遺跡II区は、山の頂上から北西方向に延びる尾根上に位置する。調査の結果、壺棺2基と溝1条を検出し、陽徳遺跡II区1号墳（第28図）と命名した。

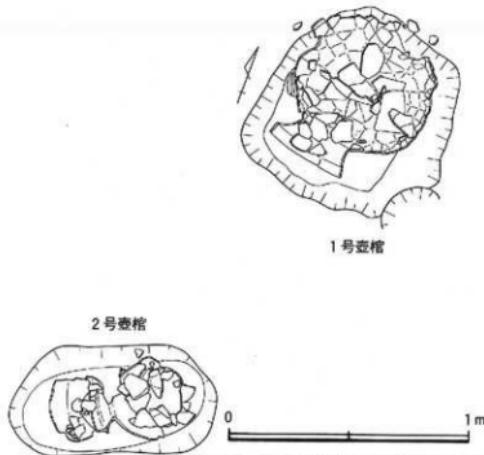
陽徳遺跡II区1号墳 II区1号墳は、調査区の東寄りで検出した。古墳は尾根上の比較的平坦になつた付近に位置し、標高は約50mを測る。後世の開墾による削平が著しく盛土等は確認できなかつたが、周溝と思われる幅1.2~2 m、長さ約5 m、深さ約30cmの溝が古墳南側で残つており、そのラインが直線状をなすことから墳形は方墳と推定される。調査の結果、壺棺が2基検出された（第30図）。なお、周溝からは壺の口縁部がまとまって出土しており、その口縁部は後述する2号壺棺の壺と接合



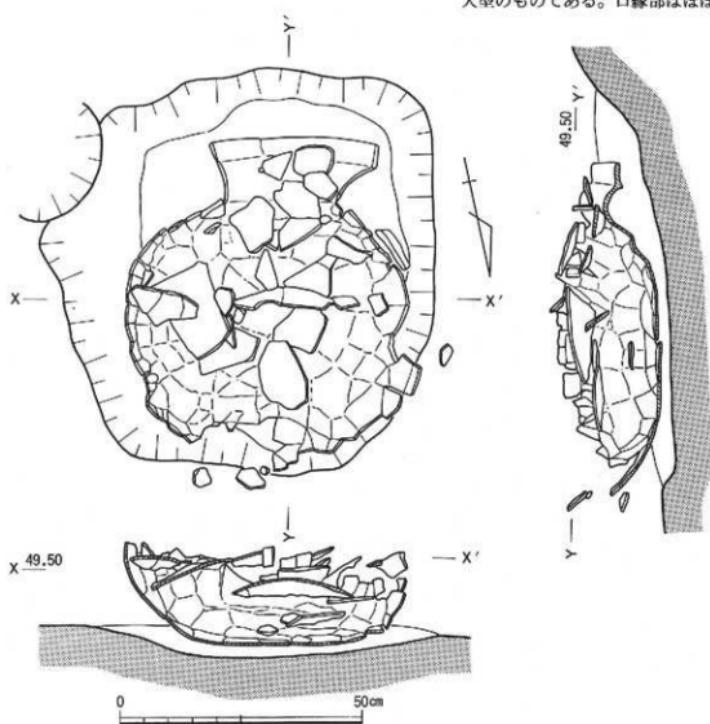
第28図 陽徳遺跡II区1号墳調査後測量図 S=1/100



第29図 陽徳遺跡II区1号墳土層断面図 S=1/60



第30図 陽徳遺跡II区1号墳壺棺配置図



第31図 陽徳遺跡II区1号墳1号壺棺実測図 S=1/10

した。

1号壺棺（第31図）周溝より北方へ約2.5m付近で検出した。土壤を堀り込み、土師器の壺形土器の口縁部を南側に横倒しにして埋葬しているが、開墾により土壤・壺棺とも上方半分以上は削平されており、周辺には土器の破片が散乱していた。

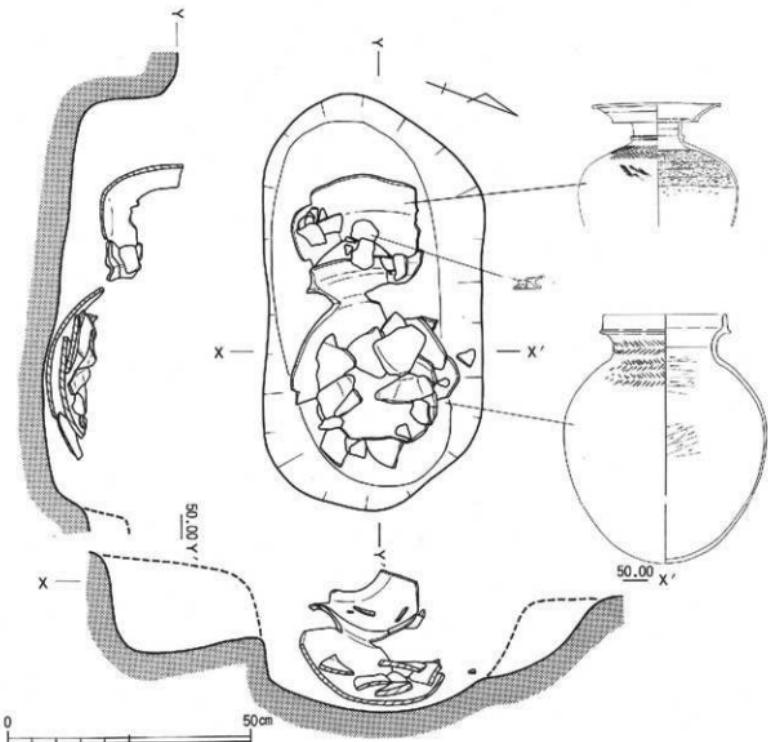
残っていた土壤は直径約80cm、深さ約10cmを測る。壺棺内部やその周辺からは土器片以外は何も出土していない。

壺（第33図-1）は口径23.0cmの大型のものである。口縁部はほぼ直

立し、端部は平坦面を形成しており、屈曲部の稜はタガ状を呈する。頸部には幅広の鋭利な工具による羽状文及び「ノ」字刺突文を施し、肩部にはヨコハケを巡らす。内面は胴部下半部は縦方向のヘラケズリ、上半部は横方向のヘラケズリで、外面は風化のため調整は不明。

2号壺棺（第33図）周溝より北方へ約1.2m付近で検出した。1号壺棺からは南方に約1m距離を置き、埋葬方向も1号壺棺と約45°違えている。やはり開墾により上方は削平されているが、土壌は長径約80cm、短径約45cm、深さ約30cmを測る。壺棺は2個体の土師器壺を合わせ、ややずれるが口縁部を西側に横倒しにして埋葬されていた。西側の壺は底部が割られ、東側の壺の口縁部と重ね合わされている。また、西側の壺は口縁部から頸部にかけて欠落していたが、古墳周溝内より出土していた壺の口縁部と壺棺周辺に散乱していた頸部と接合した。土壌内よりも出土していないが、西側の土師器壺の底面より低脚坏が直立した状態で検出した。その状況から遺体の枕として、或いは壺棺の蓋であったなどと推測されるが、かなり攪乱されている状況であるので明言はできない。

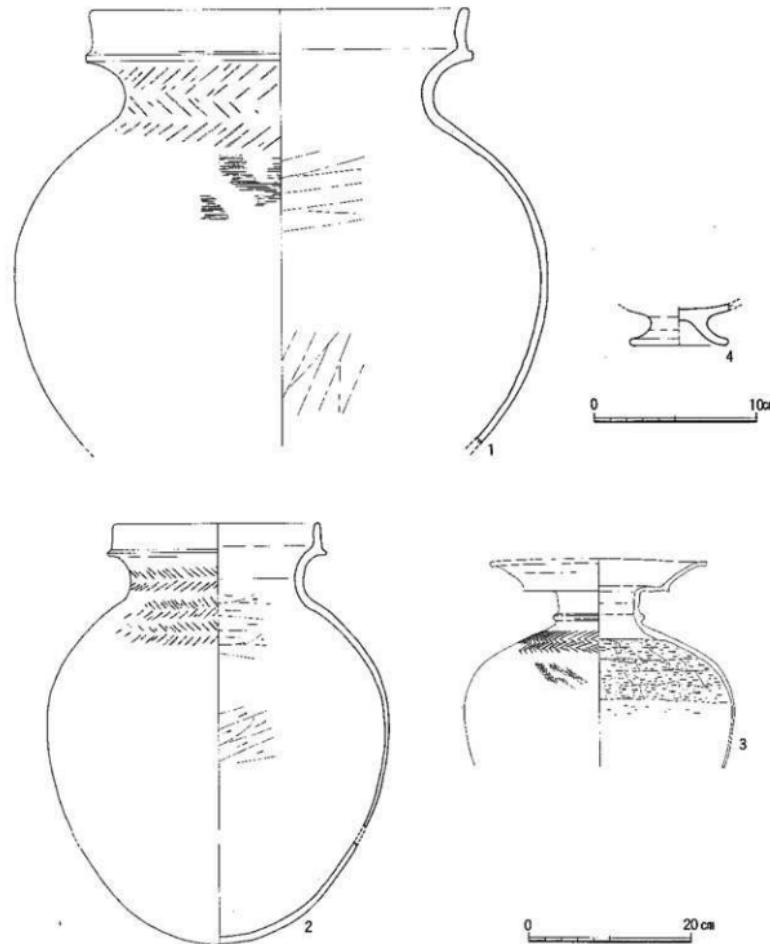
東側の土師器壺（第33図-3）は当地域ではあまり例のない2重口縁壺で口径26.7cm。体部はよく肩の張った倒卵形状を呈し、頸部は細く直立し体部との接点にタガ状の突帯を巡らす。口縁部は頸部



第32図 陽徳遺跡II区1号墳2号壺棺実測図 S=1/10

から水平に開いたのち屈曲部をもって大きく外反し、端部は面をなす。肩部には2段の羽状文を施す。胎土は当地域に通有のものである。

西側の上部器壺（第33図-2）は1と同様当地域の壺棺によくみられるタイプのもので、口径25.0 cm、器高は推定で52.3cmをはかる。器形は最大径が肩部よりやや下がった位置にある倒卵形で、底部は不安定な平底状を呈す。口縁部はやや内傾し屈曲部は横方向に突出するが1のように断面「コ」字のタガ状を呈せず、通常の上器のように先細り状となっている。口縁部端部は面を形成している。頭



第33図 陽徳遺跡II区1号墳出土壺棺等実測図 $S=1/6$ 4は $S=1/3$
(1…1号壺棺, 2～4…2号壺棺)

部から肩部にかけては3段にわたって羽状文を施す。調整は内面ヘラケズリ、外面は風化のため不明である。

低脚坏（第33図-4）は脚部のみ残存する。脚部底径は6.1cmで脚は外反気味に強く張り出し端部は丸く收める。坏部は調整は風化の為内外面とも不明。

第4節 小 結

1. 頂上部（I区）で検出された弥生時代後期の堅穴住居跡群について

標高約80m、水田面からの比高でも約75mと、際だって高所で検出された弥生時代後期堅穴住居跡群は、從来出雲地方では認識されていなかったいわゆる高地性集落の初例としての意味のみでなく、既知の遺跡の性格についても再考を迫るものである。ここでは、本遺跡における堅穴住居跡群について若干の分析を行い、過去に安来地方で調査された集落遺跡についても、本遺跡とのかかわりにおいて再評価を試みてみたい。

（1）陽徳遺跡I区堅穴住居跡の時期

堅穴住居跡から直接出土した土器は極めて少ない。よって厳密な意味での時期特定は難しいが、住居跡の型式等も勘案すれば、およその判断は可能である。なお、上器の編年については、赤沢秀則氏の南講武草田遺跡の報告における最新の成果を使用する。¹¹⁾

弥生土器は、住居跡の周囲から出土するものも含めて、第11図に示したもの11点しかないが、それらは基本的に2つの時期のものに限定されそうである。ひとつは草田編年1期、後期前葉に位置づけられるもので、1, 2が該当する。もうひとつは草田編年4～5期を中心とする時期、後期末のもので、5～11がそれである。堅穴住居跡の型式が、隅丸方形を基調としていることから、これらの住居跡が上記のふたつの時期の間の所産であることはほぼ間違いないと判断される。

ではそれぞれの住居跡はいずれの時期であろうか。まずSI02、SI03からは床面より土器が出土している。SI03から出土したのは第11図10の器台であり、これは後期末の上器と考えられる。一方SI02から出土したのは第11図4の高杯である。比較的広めの輪部をもち、杯部中央に円盤を充填する型式であるが、全形をうかがうことはできない上、この種の高杯は後期全般に見られ、当地では高杯の出土例が少ないと合わせて、現状では時期限定は難しい。つまり直接的に時期限定ができるのはSI03の後期末のみである。

次に、堅穴住居跡の型式から時期を推定してみたい。東側斜面よりに検出された2棟（SI04、05）は全形がわからぬため、SI01、02、03の3棟で検討する。SI02は、平面プランが隅丸方形ながらも、壁溝のラインがほとんど直線を呈さず、円形に近い形態を取る。一方、SI01、03は壁溝のラインが直線を呈す部分が確実にあり、方形に近い隅丸方形で、「中央ピット」はかなり片寄った位置にある。SI02は、「中央ピット」が後世の上塗が完全に失われているが、他の2者はどの片寄りはなさうである。またいずれも4木半柱であるが、SI02は柱の位置がより中央寄りにあるのも特徴といえる。

堅穴住居の平面形の変遷は鳥取県米子市青木遺跡の調査で検討が行われ、後期前半では円形が主流、後期中葉から後葉に隅丸方形、隅丸多角形が主体となり、後期末から古墳時代初めに方形ないし

長方形に変わることが明らかになっている。また、山云地方の調査でも次第に類例が増え、松江市勝負遺跡ではほぼ青木遺跡と同様の変化がうかがえるのに加え、中央ピットが次第に壁際に移動していく傾向もうかがえる。

一方安来市内では、安来道路の調査に伴い、かなりの住居跡が調査されてきており、やはり同様の傾向がうかがえる。この安来市内の調査で、本遺跡と同様の上器を出している住居跡を見てみると、まず草田1期の住居跡は、高広遺跡Ⅱ区SI01⁽⁴⁾、越峰遺跡B区SI02⁽⁵⁾、SI03⁽⁶⁾、大原遺跡SI03等があり、円形もしくは円形に近い隅丸方形を呈す。また現在調査中の本遺跡の西にある門生黒谷Ⅲ遺跡では、当該期の円形に近い隅丸方形の堅穴住居跡が検出されている。草田1期白体がまだ細分される可能性を含んでいるため、なかなか一概な比較は難しいが、本遺跡SI02に近い形態である。当該期の土器が、SI02の近辺から出土していることも勘案してみると、草田1期の土器に対応する住居跡はSI02の可能性もある。

次に草田4～5期頃の住居跡であるが、宮内遺跡Ⅱ区SI02⁽⁷⁾、越峰遺跡A区SI01⁽⁸⁾、SI02⁽⁹⁾、白コクリ遺跡SI06⁽¹⁰⁾、普請場遺跡SI06⁽¹¹⁾、07⁽¹²⁾、猫ノ谷遺跡等があげられる。これらは越峰遺跡SI02が隅円多角形以外は全て方形に近い隅丸方形で、本遺跡SI01、03と全く同様である。以上のような状況証拠からみても本遺跡SI01、02は草田4～5期のものと考えてほぼ問題ないと考えている。

以上のように、土器、住居跡とともに2型式認められるが、その各々が一致するならば古い時期（草田1期）は1棟+α（最大3棟）、新しい時期（草田4～5期）は2棟+α（最大4棟）と推測される。ただし、後期前葉においては、まだ円形プランが主体でありSI02が後期前葉から下る可能性もあって、住居跡型式の違いが草田4～5期の間に生じたものの可能性も否定できない。

（2）堅穴住居跡群の性格

本遺跡の堅穴住居跡群は、通常の集落立地よりもはるかに高い位置にあり、いわゆる高地性集落として認識しうるものであろう。「高地性集落」の概念規定や分類について詳細に語る能力も紙面もないが、まさに屏風のようにそびえ立つ山の山頂に立地する本遺跡は、明らかに日常の生活を営むためだけのものとは考えられない遺跡である。従来より高地性集落は比高が高く山頂部に立地するタイプと、比較的平地に近い立地に分類されて論じられているが、本遺跡は山頂立地、都出比呂志氏のいうAタイプであることは論を待たないであろう。

さて、本遺跡の堅穴住居跡に立ったとき、眼前に広がる眺望は見事なものである。特に北側には中海東半が一望され、弓が浜半島の向こうには日本海、美保関まで望むことができる。「出雲国風上記」によれば、弓が浜は「夜見島」と記され、奈良時代には現在の米子市街との間には海峡があったことがしられる。つまり、本遺跡の眼下に広がる米子市から安来市島田町にかけての湾は、古代においては日本海に直結した入り江であったのである。旧出雲国と伯耆国との境に近いこの地にあっては、この入り江はまさに出雲の出入口であり、まず押さえるべき要所といっても過言ではない。弥生時代後期の遺跡に古代の行政区画を持ち出すのはオーバーとしても、この遺跡がもっていたであろう、日常生活からかけ離れた特殊な機能として、日本海から「入海」に入ってくる船を監視する、見張り台的役割を担っていたと考えるのは自然なことではなかろうか。

本遺跡が見張り台の機能をもっていたとするならば、それを伝える通信機能がまた必要となる。都

出比呂志氏は、主要な通信手段として「のろし」を想定されているが、本遺跡でそれを想起させる遺構に、壁の焼けた焼土壙がある。頂上部だけで10基の土壙が検出されているが、そのうち8基が壁が焼けるなり、炭を含んでおり、何らかの形で火を使ったことが想定される。ただそのうちの2基は住居跡の覆土を切り込んでおり、明らかに後世のものである。他のものについては、遺物は全く出土せず、また比較的焼上の残りの良かったSK10については、熱残留地磁気の測定も行ったが、時期を特定できるデータは得られなかった（第5章参照）。こうした焼土壙は近年多くの遺跡で検出され、決して珍しい遺構ではないことも合わせて、これらの土壙をのろしを上げるための施設として積極的に評価するのは現在のところ差し控えたい。

（3）安来市における比較的高所に立地する集落遺跡について

平成元年度に始まった、一般国道9号（安来道路）建設に伴う発掘調査は、さながら安来市街の南側丘陵に、1本的巨大なトレーナチを入れたごとくて、数多くの多種多様な遺跡が発見された。弥生時代後期の集落もそのひとつで、比較的高い丘陵上にもかかわらず、かなりの遺跡が検出されている。従来は、やや特殊な立地が注意されながらも、陽徳遺跡ほど明瞭な形では検出されていなかったため、単なる立地の変化として捉えられていた感が強い。そこで、陽徳遺跡を基点に据えて他の遺跡の性格を再検討してみたい。

表1は、安来道路に伴う調査を中心にそれ以前の調査例を含めて、現在確認できる安来市内の丘陵上から発見された集落跡をまとめた表である。以下、これをもとに若干の分析を行いたい。



第34図 安来市東部の丘陵上の集落遺跡

No	遺跡名	標高(m)	時期	棟数	備考
1	陽徳遺跡	80	草田1, 4~5	5	
2	門生黒谷遺跡	約80	草田1, 2	10以上	調査中
3	普請場遺跡	29	草田1, 4~5		
4	猫ノ谷遺跡	34	草田4	1	小面積調査
5	才ノ神遺跡	約50	草田4~5	2	
6	越峰遺跡A区	30~34	草田4~5	3	
7	岩屋口北遺跡	約50	草田4~5	4~5	
8	臼コクリ遺跡	30~35	草田3~5	11	
9	大原遺跡	15~20	草田I, 古墳中期	5	弥生1棟斜面には赤生中~後期住居あり
10	宮内遺跡	15~25	草田2~5	6	斜面下方にもあり
11	大坪遺跡	約30	草田1	1	小面積調査
12	宮山遺跡	約28	草田5~6?	1	宮山4号墓と同時期とされる

表1 安来市における丘陵上で検出された住居跡一覧表

① 出土遺物の共通性 これらの遺跡の住居跡から出土する遺物を見ると、住居跡内から出土する上器の量が非常に少ないという特徴が受けられる。平地での住居跡調査例が少なく、比較が難しいが、数片しか出土しないのが通例で、全く出土しない例もしばしばある。生活の少ないとも感じられるこの現象は、これらの集落の特殊性的一面を表現しているのかもしれないが、詳細なデータを提示できない現状では、これ以上の追求はできない。またしばしばたたき石や石皿の類が出土することも特徴で、当該期にしてはやや異質の感がある。

② 時期の問題 安来市における丘陵上で検出された住居跡の時期を見ると、決まった時期に集中していることがわかる。1つは草田I期、今1つは草田4~5期であり、この2つの時期はまさに陽徳遺跡の2つの時期に一致する。次にふれるように特別な立地とは決めがたい程度の立地の遺跡もあるが、これだけ限定された時期に極めて高い割合で山上に住居跡が立地している事実は、そこに何か特別な事情があったことを示しているように思える。山上に立地する必然性は、その眺望の良さと結びつく可能性が強く、陽徳遺跡の出現と軌を一にしていることを考え合わせると、何らかの緊張状態に伴う情報伝達の必要性を考えるべきであろうか。

③ 立地上の問題 — 2つの類型 — 表1で集成した遺跡を見ると、大きく2つの類型があることがわかる。⁽¹⁵⁾ 1つは陽徳遺跡を筆頭に比較的高い位置にある遺跡で、才ノ神遺跡、岩屋口北遺跡がそれ

に該当する。仮に 1 類とする。岩屋口北遺跡からは、東側には間の丘陵越えてオノ神遺跡を見通すことができ、また西側には宮内遺跡や安来平野、さらにその西の丘陵を見通すことが可能である。いわば通信の幹線的役割を果たせる遺跡である。

一方もう 1 つの類型は、比較的高い遺跡で、1 類としたもの以外が該当する。仮に 2 類とする。これらの遺跡は、必ずしも一般の集落と明確に一線は引けないものの、共通する立地上の特徴がある。それは、丘陵の先端もしくは、平地に面した部分に立地していることで、そこからは必ず面した大きな谷もしくは平野の開ける方向が見渡すことができる。一見谷の奥まった場所に見える猫ノ谷遺跡も、低い峠を越えて佐久保町の低地まで一望できる。越峠遺跡には、低い谷にも住居跡があるが、谷を一望する丘陵上にあるのは草田 4 ~ 5 期のみである。また、最も一般集落に近い大原遺跡、宮内遺跡を見ると、確かに周辺に弥生時代中期、後期の住居跡があるが、ともに一棟だけ独立して眺望の良い位置に立地する住居跡（大原 SI03、宮内 II 区 SI02）があり、前者は草田 1 期、後者は草田 4 期である。幹線である 1 類からの情報をそれぞれの集団に伝達する支線的役割が想像できる。

安来市街の西側には現在、飯梨川、伯太川、吉田川により形成された安来平野（能義平野）があるが、東側は比較的高い丘陵が中海まで張り出し、現在の米子市方面との視界を遮っている。その丘陵の中で、比較的低い部分がある。現在の佐久保町から黒井田町に抜ける湿地状の谷と、鳥田町から門生町に抜ける黒谷と呼ばれる谷である。表 1 で集成した遺跡は、安来平野西側の宮山遺跡を除くと、みなこの低い部分に面した丘陵上にあたる。昼夜の多い山陰において、視覚的に何らかの通信を送る場合、最も効果的なのは見通しが良くて且つさほど高くない丘陵を小刻みに伝えていく方法ではないだろうか。そうであるならば、土工量の少ない低い部分を選んで通す現代の高速道路と、弥生時代のこの種の集落の位置が一致するのは偶然ではないことになる。陽徳遺跡で発せられる非常情報が、丘陵全体の鞍部ともいうべき筋を幹線に、支線をも経て各地に流れていく光景は想像に難くない。当然そのほかにも海岸線近くの別ルートの存在も想像されるところである。もちろん他の道路区域以外の調査例がなく、また低地での集落発見例がほとんどない現在、根拠薄弱な仮説にとどまるものであるが。

④ 他地域とのかかわりさて、安来市で丘陵上に住居跡を構える 2 つの時期は、他地域に比較するとどうであろうか。近畿、瀬戸内地方では高地性集落が作られる時期については、弥生時代中期後半と後期後半にピークがあるようである。⁽¹⁴⁾ 草田 1 期は後期前葉で、近畿、瀬戸内の前のピーク時よりも 1 段階新しい。草田 4 ~ 5 期は岩橋孝典氏の論考によれば、およそ庄内式期に併行し、やはり一段階新しい時期となる。高地性集落の増加する背景について、ここで多く語ることはできないが、近畿、瀬戸内地方を中心に展開された何らかの争乱が収束した次の段階に、周辺地域に同様の動きが広がることは十分に考えられることである。その意味では、当地での山上集落が増加する動きは、全国的な動向から離れたものではないといえよう。

以上、陽徳遺跡の性格と安来市で調査された丘陵上の集落跡について述べてきた。陽徳遺跡を基点に、安来平野にいたる通信的役割を担うものと予測をしたが、十分な根拠を積み重ねたものではない。今後の課題としては、まず丘陵上の集落に対応する低地の集落様相を明らかにすることが上げられる。出雲地方においては、沖積地における調査例が少ない。概して土砂の堆積が多いことや、現在の市街

地の下にあることなどがその理由であろうが、今後沖積地下への積極的働きかけも必要であろう。またこうした丘陵上の集落がどの範囲で展開するのか、安来市周辺での状況とともに、出雲地方全体のあり方を探る必要がある。比較的流入が少ないと言われる当該期の外来系土器の動きや環濠集落、墓制とのかかわりも、この種の集落の評価をしていく上で重要であろう。

(丹羽野 裕)

2. I区頂上部の古墳時代後期以降の遺構・遺物について

弥生時代後期以降、頂上I区の利用はいったん途絶えるが、古墳時代後期以降より各時代ごとに数種類の遺構・遺物が検出されている。中でも注目されるのは掘立柱建物群の存在であろう。しかしながら掘立柱建物群からは時期が明確にできるような遺物は出土しておらず、その性格も判然としない。ここでは、その他に検出された遺構・遺物について順を追って整理し、若干の検討をまじえ、その上で掘立柱建物の性格と意義を浮き上がらせていくたい。

出土した遺物の時期をみると、7世紀代のものと平安期のものとに大別できる。まず7世紀代の遺物をみると、遺構にはともなっていないが掘立柱建物群から東側の斜面より須恵器・高环片が出土している。そしてその遺物と同形の高环片がSD01底部より出土しており、このことからSD01はおよそ7世紀以降の遺構と推定される。しかもSD01が埋まってからSB02は建てられていることは明かであり、少なくともSB02はSD01より新しいことになる。

その他7世紀代の遺構としては、第1調査区中央よりやや南側で検出された焼土上墳SK06がある。I区で検出された残りの焼土上墳8点と比較して形態等が大幅に異なる土墳であり、熱残留磁気測定を試みた結果A.D.660±30という測定値が示された（後章参照）。土墳内より遺物が出土していないので測定値をうのみにすることはできないが、東側斜面出土の須恵器片とおおよそ同年代であり、陽徳遺跡I区より東側丘陵の麓に7世紀代の住居跡が検出された五反田遺跡や徳見津遺跡が存在する。以上のように測定値を否定する材料も見あたらないといえる。SD01と同時期に存在していた可能性も考えられるが、これらの遺構の性格は全く不明である。

次に平安期の遺物をみてみると、SK03より須恵器皿が2点出土している。この遺物の年代は9～10世紀前後と推定される。このI区ではSK03と同様の直径約80cm前後で深さが20cmに満たない小型で、炭化物のつまつた上墳が8基検出されているが、いずれも遺物がなく同時期のものとは言い切れない。その他にSK04より10枚数の上質質土器が一括で出土している。これらの土器の時期はおよそ12世紀代と推定され、須恵器皿とは時期に開きがある。

さて、これらの遺構と掘立柱建物群との関連であるが、まず掘立柱建物群の全貌について把握しておきたい。これらの建物群は、第3節で論述したようにすべての建物が同時期に存在していたようにみうけられる。遺構の検出状況をみると若干のズレはあるが、やはり一定の法則や間隔にしたがい建て分けられていたと推測される。したがって、SD01とSB01についても同時期とは考えられなくなり、掘立柱建物群は7世紀のものの可能性は低いといえる。

それでは、この掘立柱建物群の性格はどのようなものであろうか。それを直接的に示す資料は陽徳遺跡からは出土していないが、近年、同様の立地条件をもった遺跡が増加している。例えば、大田山門城寺遺跡⁽¹⁷⁾、大東町元極楽寺遺跡⁽¹⁸⁾、木次町妙見山遺跡⁽¹⁹⁾があげられる。これらの遺跡は平安期の山岳寺

院跡としてとらえられており、特に妙見山遺跡はその時期や立地条件、掘立柱建物群にからむ焼土土壙の多さ、出土遺物の共通性など非常に似通っており、出土遺物の年代も9~12世紀と幅が広く注目される。

となると、この掘立柱建物群は立地的なこともふまえ、平安期の山岳寺院の性格を多分にもった建物群であった可能性が高い。また、平安期の山岳仏教から発生したと推測され、密教系寺院である安来市清水寺と陽徳遺跡は対面する位置にある。さらに陽徳遺跡の東方には、古くから靈山として信仰の対象となっていた大山がそびえていることも見逃せない。

以上のように、陽徳遺跡は当地域の平安期における山岳寺院の様相をとらえる上で貴重な資料を提供したといえる。

(深田 浩)

3. 陽徳Ⅱ区1号墳について

今回検出した古墳は後世の開墾により大きく改変されているが、調査の結果2基の壺棺と溝1条を検出した。溝と壺棺の関係については溝で出土した壺口縁部が2号壺棺の体部と接合したため、同時期のものとして問題ないものと考えられ、既に述べたとおり小規模な方墳である可能性が高い。こうした壺の口縁を打ち欠き、体部を主体部として採用し口縁部を溝に供獻する例は当地域では例がなく、墳丘上における古墳祭式の一形態として今後注意していく必要があると思われる。

古墳の年代については副葬品がないことから壺棺に使用した上器しか手がかりはない。図33-1・3は当地域の壺棺としてはよくみられるタイプのもので、類似する資料としては鹿島町奥才13号墳例⁽²⁰⁾や斐川町狼山遺跡例⁽²¹⁾があげられる。従来の小谷式の範疇で収まるものであり、低脚坏の脚端が外反する形態も小谷式のなかでとらえて問題ない。

小谷式から大東式にの細分については近年編年案が公表され一定の成果があがりつつあるが、なお良好な一括資料に恵まれず、こと壺棺に採用される特殊な土器についてはなお明確な編年観が無いのが実状である。ここでは奥才13号墳例等から前期中葉を中心とする時期と考えておきたい。

以上の在地的上器に対し、図33-3は一見特異な上器である。口縁部の特徴は畿内系2重口縁壺に類似する。しかし頸部の空窓や肩部の文様は当地域の特色を示しており、いわゆる折衷土器であると考えられる。類似する資料としては、肩部の文様は無いが福岡市藤崎6号方形周溝墓資料、青木遺跡HSX18資料などがあり、またプロポーションが異なるが畿内系2重口縁壺に山陰的な文様が施される例として鳥取市面影山74号墳資料等があげられる。このうち藤崎6号方形周溝墓例はこの壺の他に山陰系土器やその影響を受けた土器群が出土しており布留式古段階からそれにやや遅れた時期に併行する時期とされており、青木遺跡HSX18例は青木層期後半に比定されている。また面影山74号墳は中期前半と報告されている。このように他遺跡の例をみると前期前半から中期前半にかけて存在しているようであるが、当然その中には型式差も考慮され、細かな検討については今後の検討課題としておきたい。

埋葬施設としては壺棺2基を検出したのみであり、木棺等他の埋葬施設は確認できなかった。壺棺は当地域では主として古墳時代前期に盛行したものであることが先学により指摘されている。そのあり方としては通常墳丘や溝をもたず群集するタイプと、古墳の他の主体部に付随するタイプの2者が

存在することが明らかとなっており、近辺の遺跡を例にとると前者は安来市佐久保町白コクリ遺跡⁽²⁰⁾、後者としては同吉佐町八幡山古墳⁽²¹⁾、同切川町小谷上塙墓などがあげられる。

当古墳のケースは後者に該当するものと思われるが、前述のとおり他の主となるべき埋葬施設を確認していない。これは後世の開墾によって削除されたかもしれない調査区外に存在する可能性も考えられるが、通常他の上部部と併存する場合石棺の方が床面レベルが高いのが一般的であり、埋葬施設が石棺のみであった可能性も十分考慮される。

石棺（上器棺）の系譜については松本岩雄氏によって既に検討が行われており、氏によれば当地域の弥生時代の墓制には認められず、瀬戸内や畿内など他地域の方形周溝墓や墳丘墓にみられる土器棺葬の系譜を引く可能性を指摘している。同様に一見在地的にみえる墓制が古墳時代にはいってから採用される例としては箱式石棺があげられる。当地域における定型化した箱式石棺が主たる埋葬施設として採用されるのは古墳時代にはいってからであり、他地域からの影響を受けて一定の階層・序列を示す埋葬主体として採用された可能性が既に指摘されている。石棺（上器棺）葬についても同様な視点からの見直しが今後必要となってくるものと思われ、今後の当地域の古墳時代像を考えるうえで貴重な資料を提供したと言える。

（池淵俊一）

註

- (1) 赤沢秀則 1992「南講武草田遺跡」『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書』5 鹿島町教育委員会
- (2) 鳥取県教育委員会 1978『吉木遺跡発掘調査報告書』Ⅱ
- (3) 広江耕史・藤井和久 1992『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書（勝負遺跡）』鳥取県教育委員会
- (4) 足立克己・丹羽野裕 1984『高広遺跡発掘調査報告書』鳥取県教育委員会
- (5) 宮本正保・山尾一郎 1993『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書（越畠遺跡・宮内遺跡）』鳥取県教育委員会
- (6) 今岡一三・寺尾令 1994『白コクリ遺跡・大原遺跡』『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』V 鳥取県教育委員会
- (7) 註(5)文献と同じ
- (8) 註(6)文献と同じ
- (9) 大庭俊次 1995『才ノ神遺跡・音詠場遺跡・鳥山黒谷I遺跡』『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』9 鳥取県教育委員会
- (10) 大庭俊次 1994『明子谷遺跡・鳥山黒谷II遺跡・猫ノ谷遺跡』『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』VI 鳥取県教育委員会
- (11) 畠岡秀人 1986『高地性集落』『弥生文化の研究』7を参考にした。
- (12) 都出比呂志 1974『古墳出現前夜の集団関係一從川水系を中心に』『考古学研究』20-4
- (13) 前述したように、高地性集落は概して明確な山頂立地のものと、比較的低い位置のものに分類されているが、ここでの類別は安来市内の遺跡を対象にした分類で、一般的な分類とは結果的には近いものの異なる。たとえば、ここで高い立地の部類に分類した岩屋口北遺跡などは、一般的には平地に近い部類もしくは中間形態と捉えられる遺跡であろう。
- (14) 註(11)文献、伊藤実 1991『瀬戸内の環濠集落と高地性集落』『児島隆人先生喜寿記念論集古文化論叢』
- (15) 岩橋孝典 1994『出雲における庄内式併行期の様相』『庄内式土器研究』Ⅶ
- (16) 岩橋孝典 1994『一般県道米子伯太線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 石山遺跡』鳥取県教育委員会
- (17) 大田市職員共済会『大田市の文化財散歩』1980
- (18) 大東町教育委員会・二刀屋町教育委員会『洞善寺遺跡・峯寺要塞群・元極楽寺跡』1993
- (19) 本次可教育委員会坂本論司氏の御教示による
- (20) 三宅博士・広江耕史他 1985『奥才占群』鹿島町教育委員会
- (21) 東森市良 1967『山陰地方発見の石棺とその特色』『考古学研究』14-2
- (22) 花谷めぐみ 1987『山陰占式土器の型式学的研究』『島根考古学会誌』4

- (23) 松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』8
- (24) 沢石哲也編 1982「藤崎遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集』福岡市教育委員会
- (25) 註(2)と同じ
- (26) 船井武彦・平川誠 1987「面影山古墳群・吉岡遺跡発掘調査報告書」『鳥取市文化財報告22』鳥取市教育委員会
- (27) 註(21)と同じ
- (28) 註(6)と同じ
- (29) 内田 才 1970「(2)前期古墳文化」『安来市誌』
- (30) 近藤 正ほか 1961「島根県安来平野における土壙墓」『上代文化』36
- (31) 松本岩雄 1986「墳丘出土の大形土器」『山陰考古学の諸問題』 山本 清先生喜寿記念論集刊行会
- (32) 註(10)と同じ

第4章 平ラⅠ遺跡

第1節 調査の経過と概要

平ラⅠ遺跡は、安来市吉佐町字平ラに所在する。中海から南に入る小さな谷の奥に位置する。標高は16~20mで現況では果樹園となり、比較的低平な地形を呈している。

調査に入った平成6年度当初は、住居跡等の遺構の検出を想定して試掘調査に入ったが、考えていた以上に畑造成時の改変が著しく、当初の地形はほとんど残存しておらず、谷底付近に辛うじて包含層が残っていることが予想された。そこで、平成6年10月から、比較的遺物が多く出土する谷の北西側を中心に約800m²の本調査を行った。またこの調査区の東側の丘陵斜面に、道路建設に伴い送電線鉄塔の移設の計画があったため、同年5月に試掘を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

調査の結果、当初予想通り、旧地形の大部分は後世の造成により破壊されていることが明らかになった。ところが、谷底付近には小規模な河道が走り、底にかなりの量の遺物が含まれていることがわかった。遺物は弥生時代中期の上器から須恵器、土師器、備前系陶器、瓦器、石器と多種にわたる。残念ながら、層位的には、各種の遺物が混在して出土しているが、その多様さや量からみて、上方の斜面には長期間に渡る集落跡が存在している可能性が高いものと判断された。

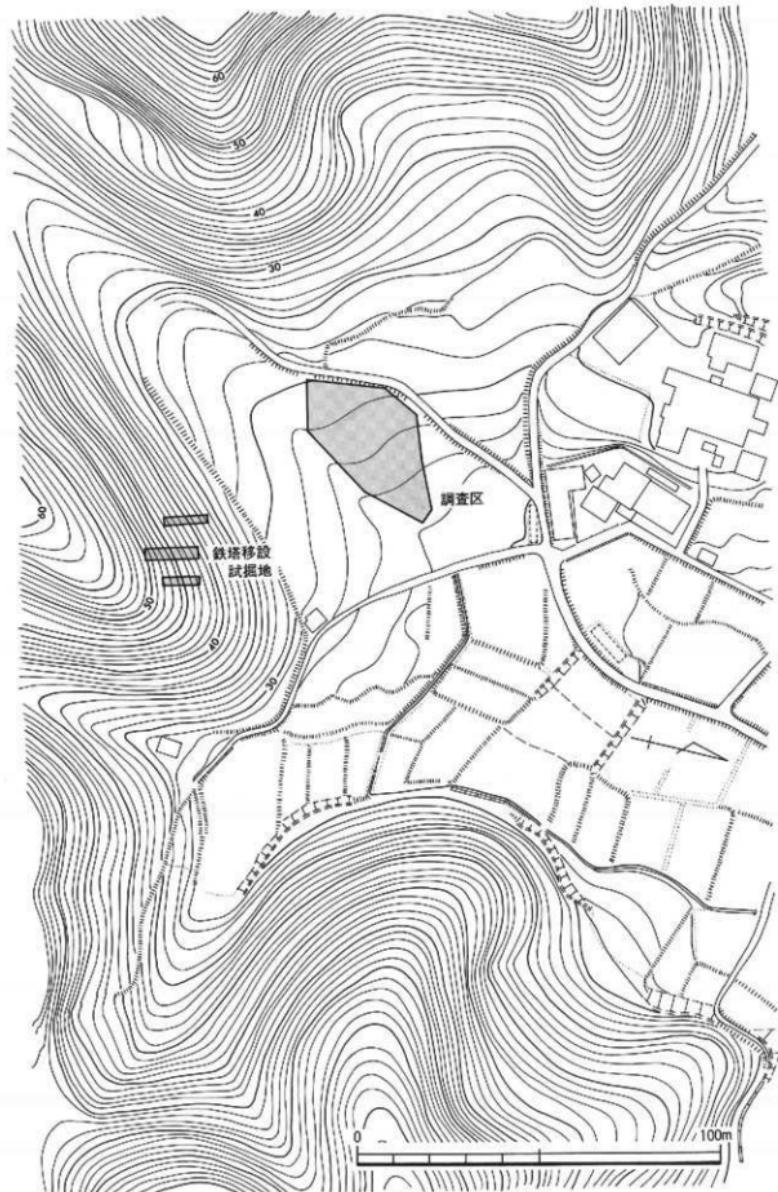
第2節 遺構と遺物

平ラⅠ遺跡の調査区は、北に向かって開く谷の奥まった緩斜面に位置する。谷底には狭い水路（本来は自然の流路だったと考えられる。）があり、その水路を境に南東側を調査した。調査は便宜的に3つの地区に分け、上流側からA,B,C区と名付けた。

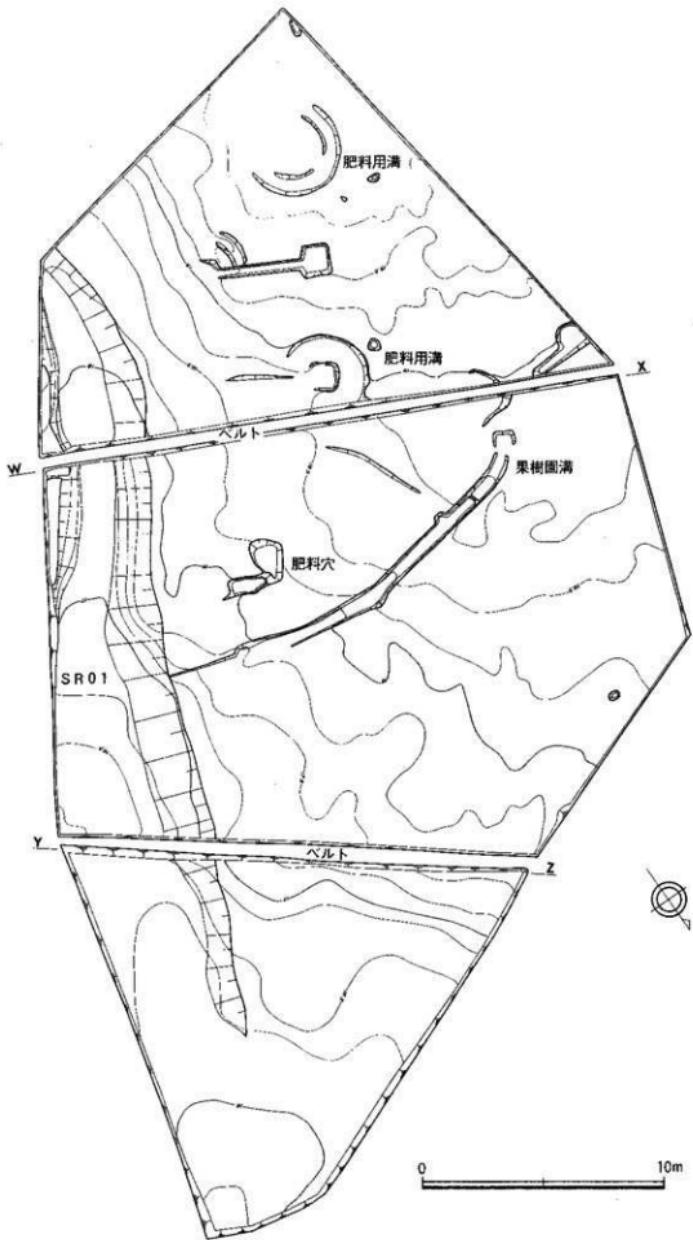
調査区の大半は、果樹園造成時に旧地形に至るまで掘り起こされ、地山面には果樹園に伴うビニール等も含まれる溝や肥料用の穴が検出されるのみであった。肥料穴は、果樹の周囲を取り囲む円形の溝状に掘られるのが通例で、土壤状に掘り込まれたものもある。地元の人の話によると、造成時には胸の高さ以上に掘り返したといい、調査の状況に一致している。

調査区の南東端（谷底付近）には、溝状の自然流路と考えられるもの（SR01）が検出された。このSR01は、上流側は幅が3mと狭く、下流側に向かって次第に幅が広がり、また斜面の傾斜も緩くなって自然に消滅している。おそらく現在流れている水路の旧河道で、その形態から人為的に掘られたものではないと考えている。

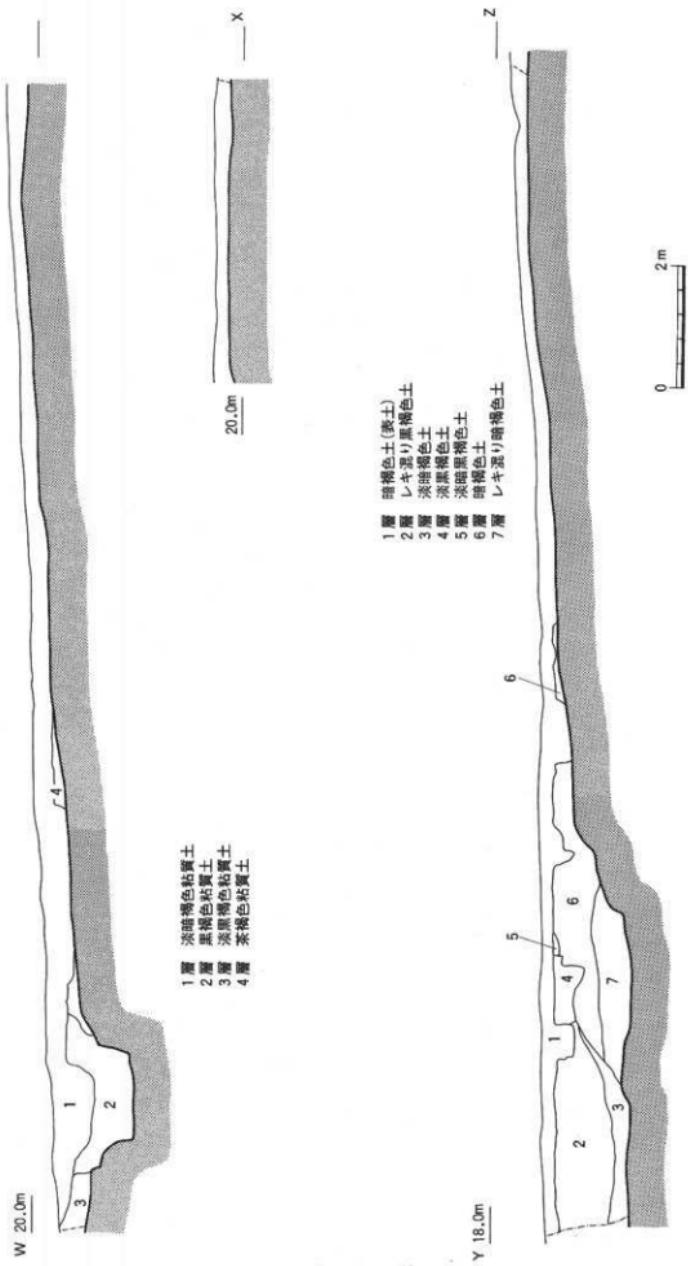
流路内の土層は、概して黒色系の土が堆積しており、疊混じりの土層もあることから、比較的水が流れている時期と、流れが少なく滞水していた時期があったものと推測される。堆積土内からはかなりの量の遺物が出土した。Y-Z上層を見ると、SR01が埋まった後に、別の水路が掘られたような痕跡が観察できるが、平面的には全く検出できず、また上流側では認められない。1度流路がある程度埋まった後に、狭い幅で水路が掘削された可能性がある。ただ、遺物の時期の差は認められなかつた。これらの遺物は、明らかに2次的に流入してきたもので、上流側に本来にこれらの遺物をもつ遺構や包含層が存在すると考えられる。



第35図 平ラⅠ遺跡周辺の地形測量図



第36図 平ラⅠ遺跡発掘後の地形測量図



第37図 平ラⅠ遺跡土層断面図

出土遺物

遺物は、その大部分が、SR01から出土したものである。層序によって時期差等はうかがえなかつたので、一括して種類ごとに記述する。

弥生土器・古式土師器（第38図） 1～5は、弥生時代中期後半の壺口縁部である。いずれも口縁は斜めに立ち上がり、外には凹線を施す。4は凹線の上に縱方向の細長い刺突文を施す。頸部には突帯を貼り付けている。8～9がこれらの壺あるいは壺の底部であろう。6は弥生中期の鉢である。外面には比較的幅の広い凹線が施され、内面は横方向のハケメが施されている。

7は弥生後期の鼓形器台の口縁部である。内面はヘラミガキが施されている。11～13は弥生時代後期から古墳時代初めの壺、壺である。11の壺は口縁が外方に開き、端部はやや尖り気味である。12、13はともに屈曲部の直上面に浅い沈線を施し、端部は外方につまみ出している。16も弥生時代末から古墳時代初頭の高杯であろう。脚端部は僅かに下方につまみ出し、外面にできた面に浅い凹線を一条施している。内面にはハケメがみられる。

14は古式土師器の壺である。頸部外面には貝殻による刺突羽状文を施している。口縁部は失われてゐるが、やや内方に立ち上がるようだ。17は古式土師器壺である。口縁部は僅かに内傾して立ち上がる。15は小型の壺である。口縁部は退化してはいるが2重口縁を呈している。古墳時代中期に下るかもしだれない。

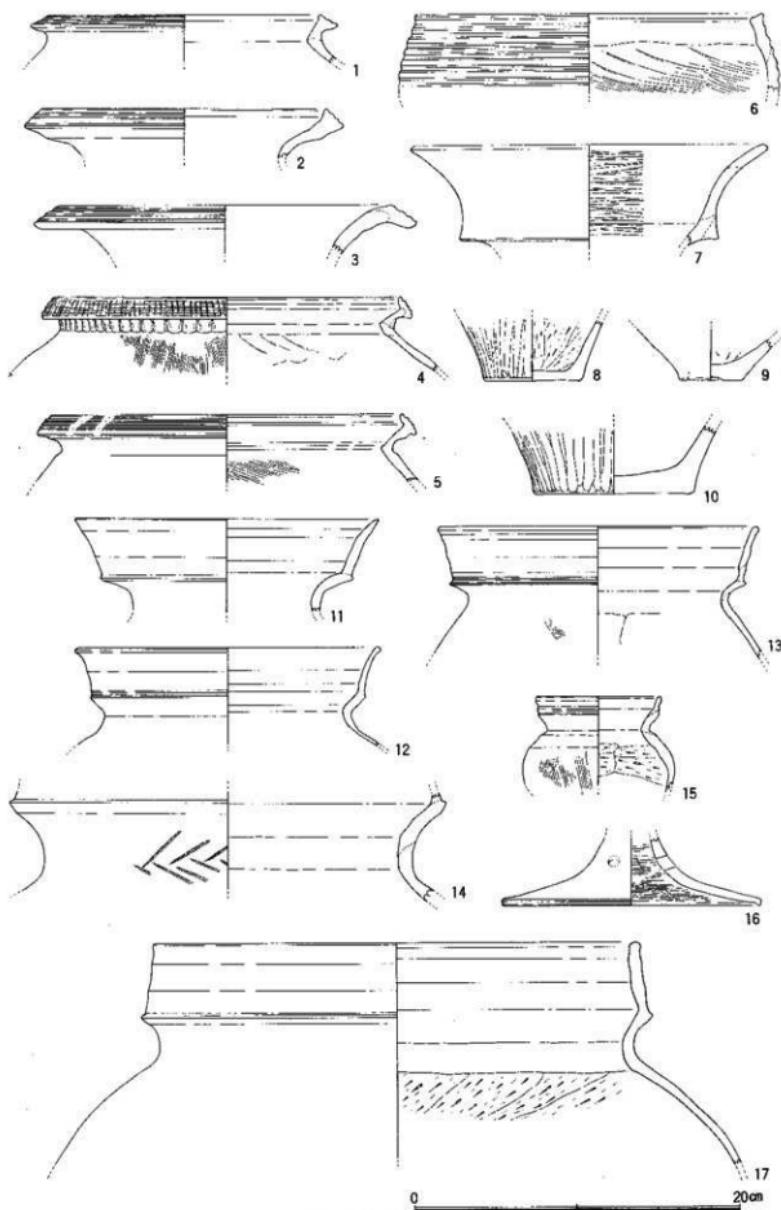
須恵器（第39図・40図・41図99～101・42図102～104） 18～30は蓋である。18～22・26はかえりのないもので、18、19、22がおよそ6世紀後半代、20、21、26が7世紀前半代のものであろう。28は宝珠つまみがつく。24、25、29、30は輪状つまみが付くタイプで7世紀後半から8世紀のものか。27はつまみがなく、天井部には回転糸切り痕を残す。天井部から口縁部にかけて屈曲部があり、およそ8世紀後半から9世紀代のものと考えられる。

31～41はかえりの付く杯身である。32は口縁部がほぼ直立し、底部のケズリも上方まで入っていることから5世紀末頃のものであろう。33～37は6世紀後半代、31、38から41は7世紀前半代のものであろう。42～52は高杯である。およそ7世紀から8世紀代のものであろう。47は小型の壺の可能性もある。

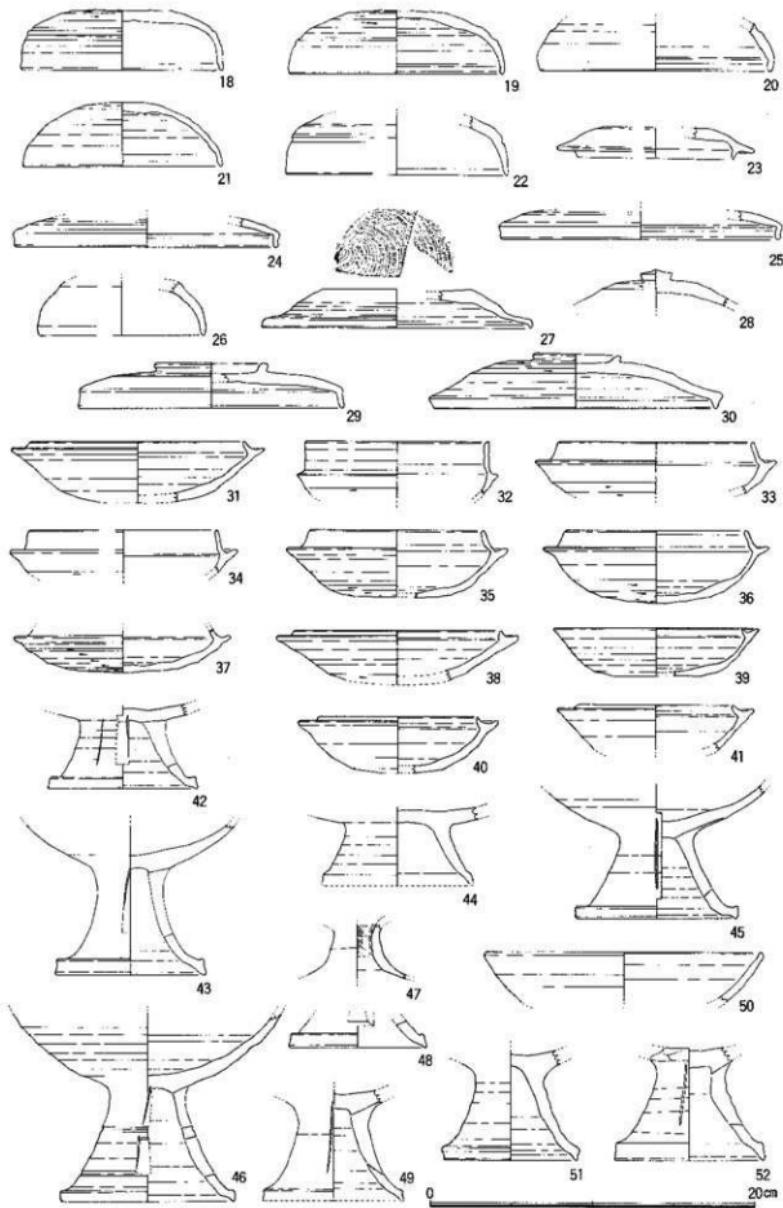
53～68、71は高台の付く杯身である。7世紀から9世紀代のものであろう。69、70は壺の底部である。72～74は、高台の付いた皿である。75～78は高台がなく、底部に回転糸切り痕の残る杯である。75、77は、口縁端部を僅かに外方につまみ出している。8世紀代のものであろう。79は、体部中央のやや上方から内側に向かって口縁にいたる鉢で、口縁端は僅かに上方につまみ出すように納めている。小型ではあるが鉄鋤形土器の可能性がある。80は高杯である。

81は、中心からずれて口頸部がとりついており、平瓶と考えられる。82は壺の体部である。下半には回転ヘラケズリ痕が残る。6世紀後半代のものであろう。83は壺である。口縁端部は上下につまみ出され、その外面に凹線がめぐる。8～9世紀のものか。84、99～104は壺である。

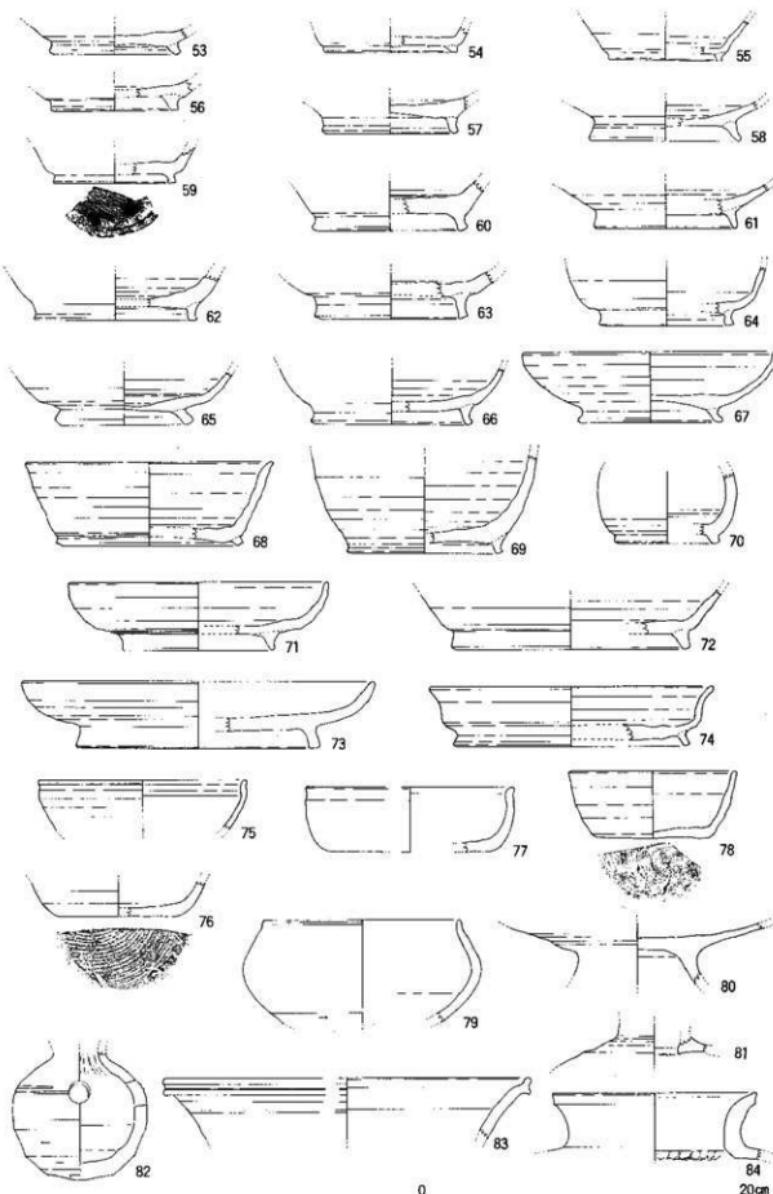
土師器（第41図85～98） 85～91は高杯である。86は杯部と脚部を一体で作り円盤を充填するタイプ。87は短い脚で端部に向かってかなり開いている。この2点は古墳時代でも比較的早い時期のものか。88～91は古墳時代中期以降のものと考えられる。93～97は壺である。93は、口縁部に僅かに偏曲点があり、2重口縁の痕跡が残るタイプかもしれない。94～97は単純な口縁が外方に開いている。93



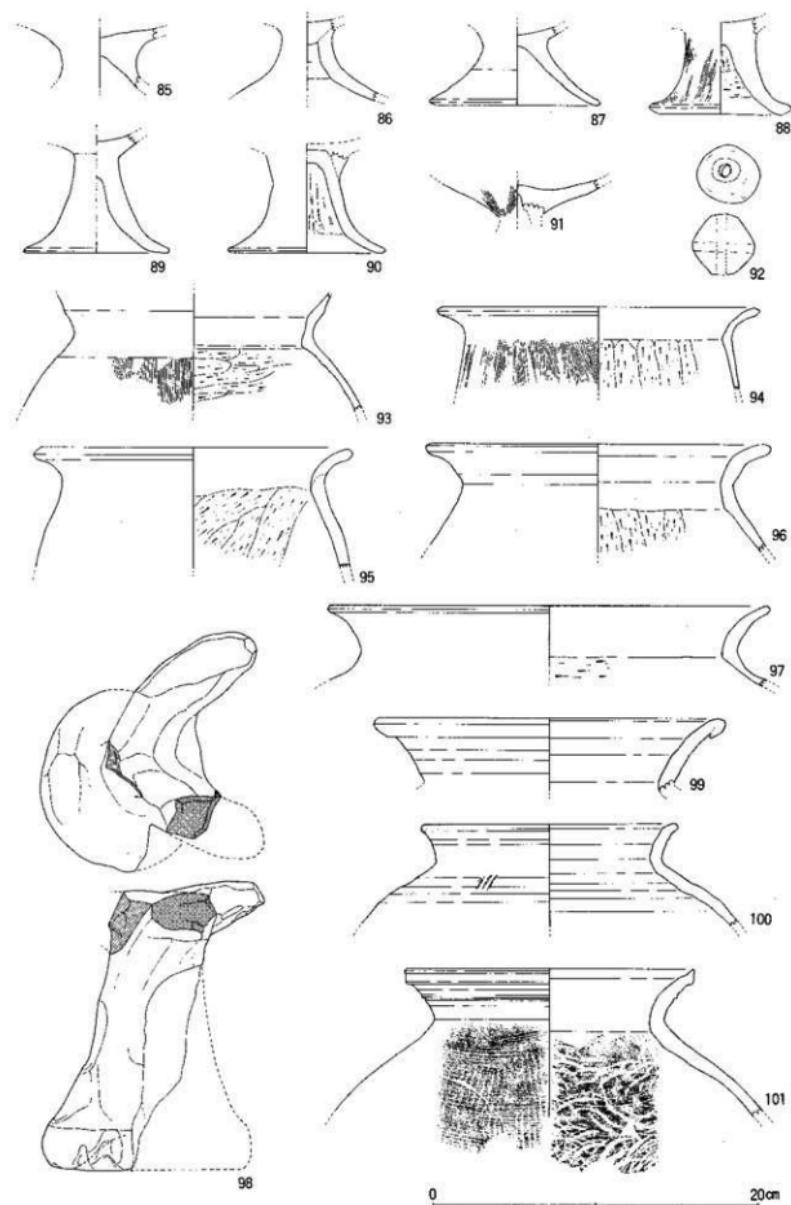
第38図 平ラⅠ遺跡出土物実測図(1) S=1/3



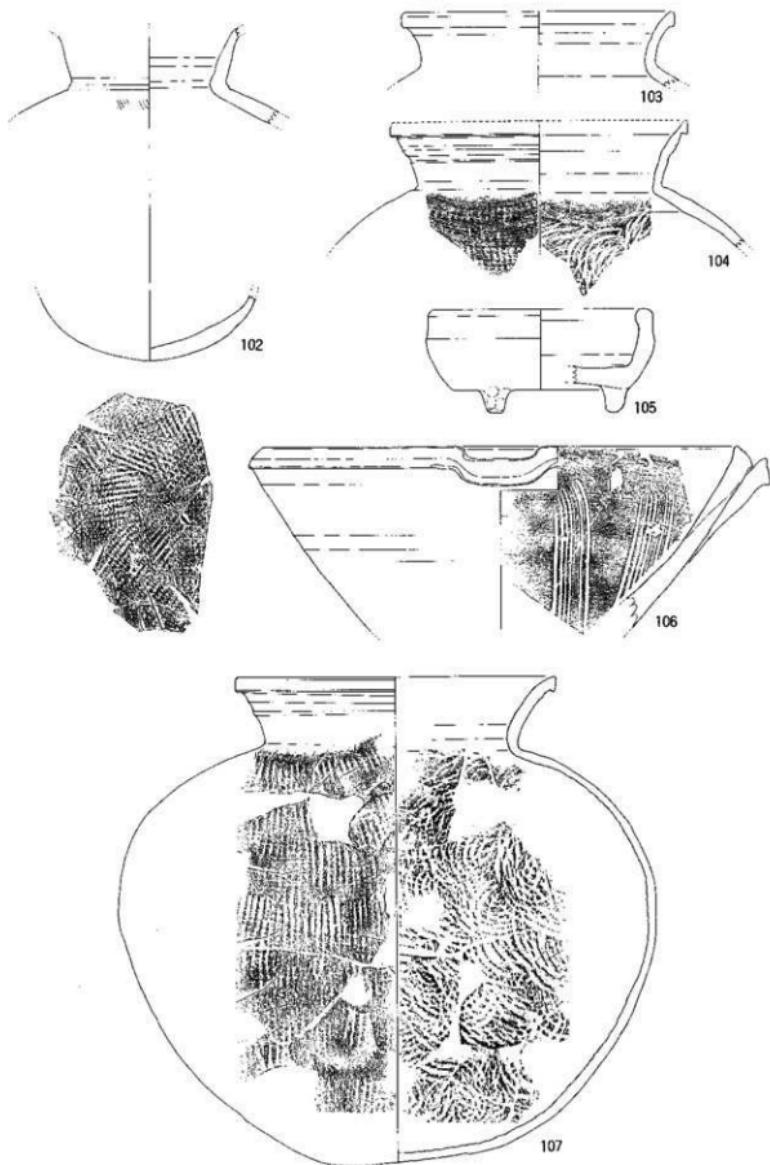
第39図 平ラⅠ遺跡出土遺物実測図(2) S=1/3



第40図 平ラⅠ遺跡出土遺物実測図(3) S=1/3



第41図 平ラⅠ遺跡出土遺物実測図(4) S=1/3



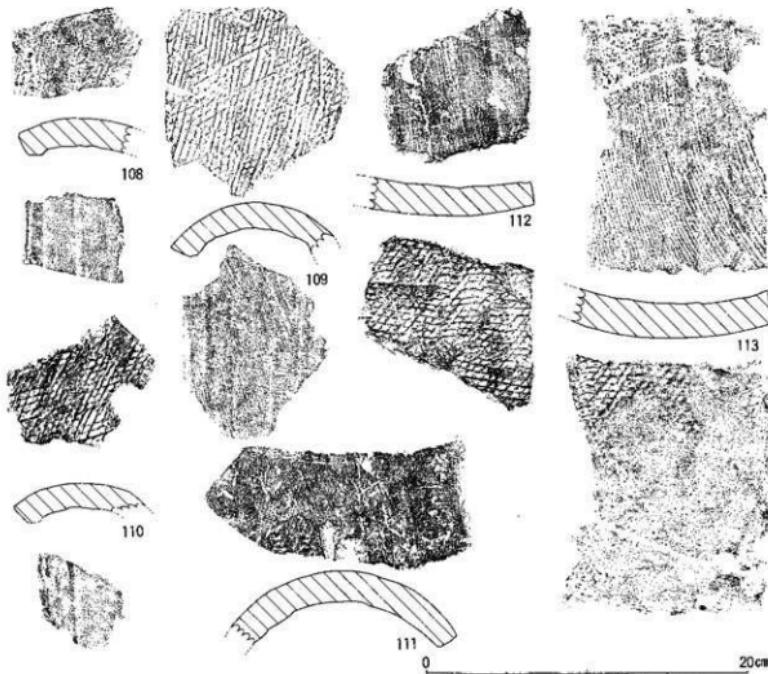
第42図 平ラⅠ遺跡出土遺物実測図(5) S=1/3

は5世紀代まで遡るかもしれないが、その他は古墳時代後期以降のものである。98は上製支脚である。

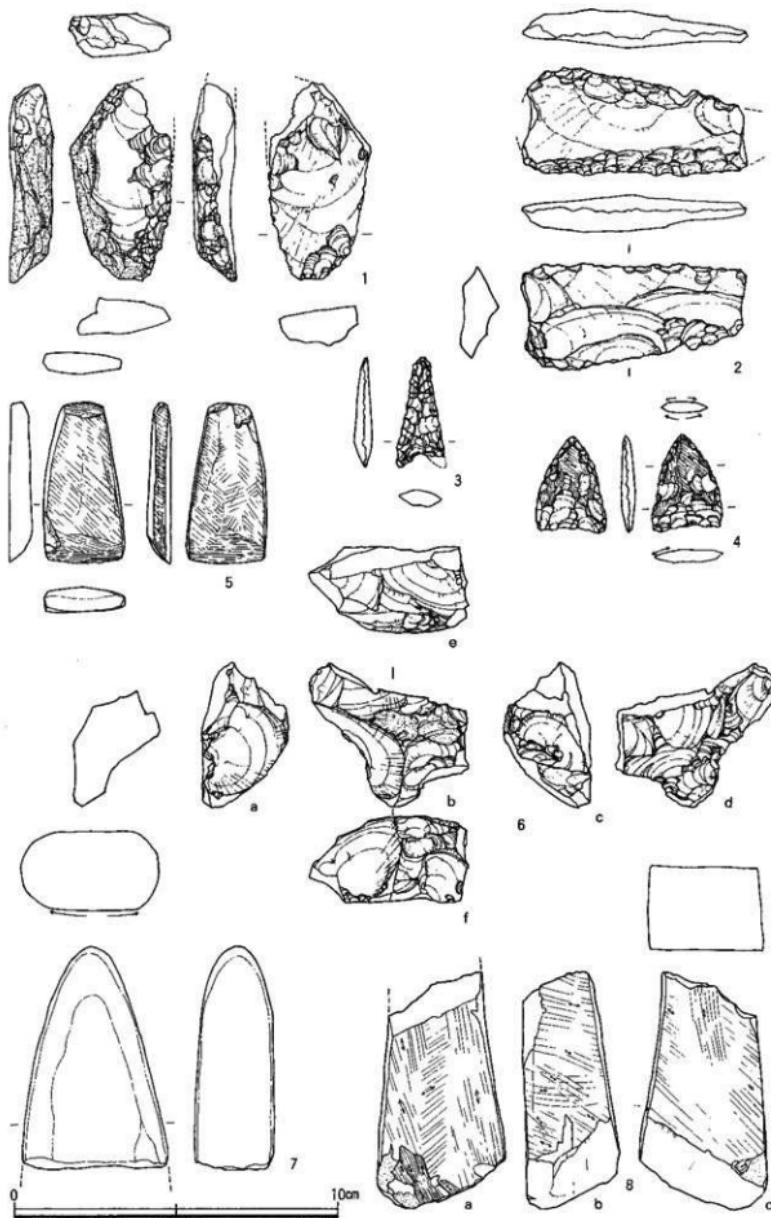
その他の土製品 第41図92は土鍤である。算盤状の形態をとる。第42図105は3足をもつ瓦器の鉢である。全体に分厚いつくりで、口縁端部は円く膨らませている。106は備前の摺鉢である。口縁部は上下に僅かに肥厚している程度で、内面には6条の条線が間隔をおいて施されている。色調は赤褐色である。

瓦（第43図） 108～111は丸瓦、112、113は平瓦である。いずれも内湾面には細かい布目痕が観察される。外湾面は、多くが格子状タタキ痕が残るが、108には平行タタキ痕とケズリが、111には布目痕とケズリが観察される。古代の瓦である。

石器（第44図） 1は黒曜石製スクレイパーである。長さ6.1cm、幅3.1cm、厚さ1.3cmを測るが、上端部を調査時に欠損している。素材は平坦な打面から取られた縦長剝片で、背面にはほぼ同一の方向からの剥離面が1枚認められ、自然面も大きく残る。2次加工は、1側面に集中して施されている。基本的に腹面から比較的急角度の搔器様の加工が行われるが、上方（打面側）にいくに従って鋭角な加工になっていく。また腹面の一部には平坦剝離による2次加工が見られる。2は、安山岩製スクレイパーである。長さ6.9cm、幅3.3cmを測る。素材は横長剝片で、背面に底面が認められることから、剝片素材の石核から取られたことがうかがえる。背面には同一方向の剥離面が数面認められる。2次



第43図 平ラⅠ遺跡出土遺物実測図 S=1/3



第44図 平ラⅠ遺跡出土石器実測図 S=2/3

加工は、おもに腹面側の両側縁に細かく施されているが、背面側にも一部認められる。両端は調査時に欠損している。

3は安山岩製石鎌である。長さ3.4cm、幅1.5cmと細身の石鎌で、基部は若干えぐられているが、片面の脚は欠損している。先端部はやや鈍角に加工されており、あるいは欠損後の再加工があるかもしれない。4は安山岩製の半磨製石鎌である。長さ3.0cm、幅2.1cmとやや太身で、基部は畳かにえぐっている。両面とも整形のための剝離後に磨いているが、研磨面は全面には及んでいない。片面には中央に僅かながら棱が認められる。

5は長さ4.9cm、幅2.5cm、厚さ0.7cmと小型の偏平片刃石斧である。全面を丁寧に研磨して仕上げており、側面には面取り状の棱も見られる。刃部付近は横方向の研磨痕が観察されることから、ほとんど使用されていない可能性がある。刃こぼれもほとんどない。刃角はおよそ45°程である。

6は黒曜石製の石核である。b,c,d面に見られる剝離面は、リング、フィッシャーが剝離面の中心に向かって集束しており、あるいは熱破碎があったかもしれない。剝片を剝離するにあたっては、規則的な剝離は認められず、打面、作業面を転移しながら不定形の剝片を取ったものと推測される。

7は磨製石斧の基部と考えられる。淡緑灰色のキメの粗い石材を使っており、基部はややとがり気味である。8は白色緻密な石材の砥石である。上方は欠損しているが、他の5面には研いた面が観察され、特に大きな4面はツルツルになっている。a面には幅3~5mmの断面半円形の研ぎ面が認められ、断面が円形で小型の品を研いたものと考えられる。

なお、國化はしていないが、かなりの鉄滓も出土している。

第3節 小 結

平ラⅠ遺跡では、弥生時代中期から中世にいたる多種多様な遺物が出土した。石器の中には、縄文時代以前に遡る可能性があるものもあり、上限はもっと遡るかもしれない。この奥まった谷のさらに奥に、長期間にわたって人々が活動していたことを示す貴重な例であろう。

これらの遺物を詳しく見ると、弥生時代中期後半以降、ほぼ間断なく遺物が出土しているようではあるが、量が増えるのは古墳時代後期、およそ6世紀後半以降である。これは、同じ吉佐町内の他の遺跡の調査と同様の傾向であり、この辺りの本格的な開発が古墳時代後期に行われ、人口が増えたことを示しているのであろう。また、すぐ西側に隣接する谷で調査された（平成6年度）山ノ神遺跡、徳見津遺跡、五反田遺跡では6世紀後半から7世紀の大規模な鍛冶構が検出されている。この平ラⅠ遺跡でもかなりの鉄滓が出土しており、あるいは周辺に同様の遺構が存在した可能性もある。また布日の残る瓦が多く出土しているが、隣接する平ラⅡ遺跡でも瓦が出土しており、注目される。古代寺院や官衙跡などは想定しにくい地形であるだけに、生産遺跡が周辺にある可能性も考慮にいれる必要があろう。

註

- (1) 島根県教育委員会 1994「石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡：『一般国道9号（安来道路）建設予定期内埋蔵文化財調査報告書』」
- (2) 椿真治 1995「五反田遺跡・徳見津遺跡発掘調査中間報告」『島根県埋蔵文化財調査センターニュース』10号

第5章 自然科学的分析

陽徳遺跡焼土の地磁気年代

島根人学理学部 時枝克安、島根職業能力開発短期大学校 伊藤晴明

1. 地磁気年代測定法の仕組

地磁気は一定ではなく、周期の短いものから長いものまで様々な変動をしている。これらの変動の中でも、時間が10年以上経過すると顕著になるような緩慢な変動を地磁気永年変化と呼んでいる。地磁気年代測定法の時計の働きをするのは、この地磁気永年変化であり、過去の地磁気の方向の変化曲線に年代を日盛って、地磁気の方向から年代を読みとるようにするものである。しかし、例えば、ある須恵器窯の年代を知ろうとするとき、窯の操業時の地磁気の方向がどこかに記録されており、それを測定できなくては窯の年代を知ることはできない。実は、窯の操業時の地磁気の方向は、窯の焼土の熱残留磁気として記録されている。したがって、地磁気年代を求める手順を述べると、まず、窯の焼土の熱残留磁気を測定し、焼土が加熱されたときの地磁気の方向を求める。そして、この方向に近い点を地磁気永年変化曲線上にもとめて、その点の年代目盛りを読みとる。

地磁気中で粘土が焼けると、含有されている磁鉄鉱等が担い手となって、焼土は熱残留磁気を帯びる。この熱残留磁気の方向は焼けたときの地磁気の方向に一致し、しかも非常に安定であり、磁鉄鉱のキュリー温度以上に再加熱されないかぎり数万年以上前が経過しても変化しない。つまり、焼上は焼成時の地磁気の方向を正しく記憶していることになる。それゆえ、年代既知の焼土を利用して、その熱残留磁気から、過去の地磁気の方向が時間とともにどのように変化したかを、あらかじめ測定しておけば、このグラフを時計の目盛りとして、焼上の最終焼成年代を推定できる。

この時計では地磁気の方向が針に相当し、焼土の熱残留磁気が焼成時の針の位置を記憶していることになる。日本では、広岡によって西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線がかなり詳しく測定されているので、この方法が焼土の簡便な年代測定法として実用化されている。⁽¹⁾ 地磁気年代測定法の詳細については中島による解説が参考になる。⁽²⁾

2. 地磁気年代測定法の問題点

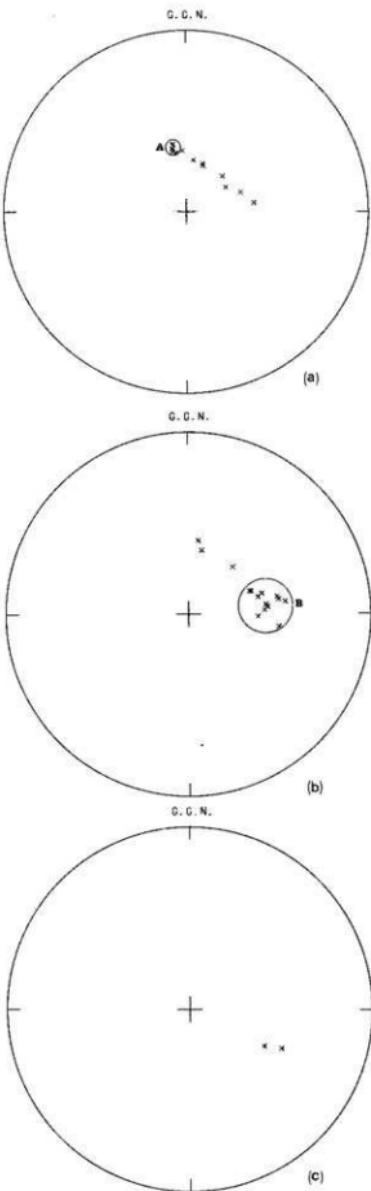
第1に、地磁気の方向は時間だけでなく場所によっても変化するので、地域によっては、その場所での標準曲線の形が西南日本のものからかなり相違していることが挙げられる。厳密に言えば、ある焼上の地磁気年代を求めるには、焼土の熱残留磁気をその場所の標準曲線と比較しなければならない。相違が小さいときには西南日本の標準曲線を代用できるが、相違が大きいときにはその地域特有の標準曲線を決定し、この曲線と焼土の残留磁気の方向を比較する必要がある。我々の考古地磁気調査の今までの結果では、岡山、広島、島根、鳥取の各県において、広岡による西南日本の地磁気永年変化曲線で決定した地磁気年代は考古学的年代とよく整合しているので、これらの地域では広岡によるものを標準曲線として採用しても問題はない。

第2に、「地磁気年代測定法は地磁気変動という物理現象を利用しているので、地磁気年代は土器

編年に左右されない」と思われるがちであるが、そうではなく、両者の間には密接な関係がある。すなわち、少數の年代定点をのぞくと、標準曲線上のほとんどの年代日盛りは考古学の土器編年体系を参照して決められている。それゆえ、年代定点に近い地磁気年代には問題がないが、年代定点から離れた値は土器年代の影響を強く受けしており、もし、土器編年に改訂があれば、それに伴って訂正しなければならない。年代定点の数が増加すると、地磁気年代はこのような相互依存から独立できるが、現状では年代の分かった焼土は少數なのでやむを得ない。しかし、地磁気年代測定法は、地磁気を媒介とする対比のおかげで、焼土跡に遺物がない場合でも有効である点、相互に隔絶した土器編年を対比できる点で独自の性格をもっている。

3. 遺跡と試料

陽徳遺跡（鳥取県安来市門生）は安山岩塊の丘陵の尾根にあり、風化岩盤を削り込んで構築された弥生時代の住居跡5基と焼土壙等が見つかっている、これらの遺構のうち2基の焼土壙SK06、SK10について定方位試料を採取し、地磁気年代の推定を行った。焼土壙SK06は弥生時代住居跡SI02の中央部にあり、住居跡の炉跡のように見えるが、住居跡の埋上層の上に作られているので住居跡の付属施設ではない。2基の焼土壙はSK06の西側周縁部を除くと見た日にはほとんど焼いていない。遺物に関しては、弥生時代の上器が住居跡から出土し、平安時代の土器片がSK04、SB01、SD01の遺構近辺から出土している。しかし、2基の焼土壙SK06、SK10の内部からは遺物は見つかっていない。地磁気年代測定用の試料としてSK06から14個、SK10から15個、参考資料として遺構表面の風化した未焼成岩盤から2個の定方位試料を採取した。これらの定方位試料は立方体状に加工した焼土塊に小プラスチックケース（24×24×24mm）をかぶせて石膏で隙間を充填する仕方で採取している。試料の方位はプラスチックケース



第45図 焼土壙SK06、SK10および未焼成岩盤の残留磁気の方向
(a) SK06 (b) SK10 (c) 未焼成岩盤

上面の走行と傾斜をクリノコンパスで測定している。

4. 測定結果

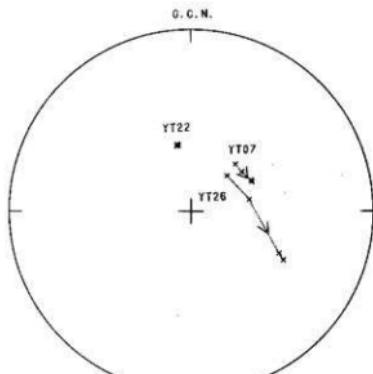
残留磁気の方向と強度をスピナー磁力計で測定した。第45図は残留磁気の方向の測定結果を示している。SK06の焼成度のよい6ヶのデータはすべて円Aに集中している(第45図(a))。全体に焼成度が低いSK10のデータは円Bに集中する傾向がある(第45図(b))。そして、上記以外の両遺構のデータは円A,Bを結ぶ線に沿って分布している。また、円Bの方向は未焼成岩盤の残留磁気方向(第45図(c))に近接し、また、過去2000年間における地磁気変動範囲(伏角 48 ± 15 度、偏角 0 ± 15 度)をはるかに越えている。このことは、きわめて焼成度が低いために、円Bの試料が岩盤の加熱以前の残留磁気の大部分を保持していることを意味している。

測定された残留磁気の起源を解釈するために、3ヶの試料について3000eまでの交流消磁を行った。交流消磁というのは、磁気的なクリーニング法であり、試料を交流磁場中に置いて、磁場のある値から零まで滑らかに減少させ、安定性の劣る磁気成分を除去する操作をいう。交流消磁によれば、低温度の熱残留磁気や地磁気による粘性残留磁気等は低い消磁場で速やかに消失するが、高温で獲得された熱残留磁気は安定しているので、双方を区別できる。

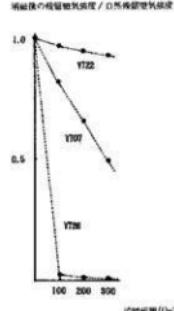
粘性残留磁気というのは、磁性物質を地磁気中に長期間に放置したとき地磁気の方向に獲得される磁気成分であり、磁性鉱物のサイズに依存し、微粒子の粘土では無視できるが、比較的大きい磁性鉱物を含有する岩石では問題になる。

第46図と第47図は交流消磁による残留磁気の方向と強度の変化を示している。YT22(円A内の試料)は交流磁場によって方向、強度ともにほとんど変化しない。しかし、消磁場が増加するにつれて、最初円A,Bの中間に位置していたYT07(SK10)とYT26(SK06)の方向は、次第に未焼成岩盤の残留磁気の方向に近付き、同時に、残留磁気の強度が速やかに減少している。

さて、安山岩の磁性鉱物は磁鐵鉱なので、試料が575°C(キュリー温度)以上に加熱されると、そ



第46図 交流消磁による残留磁気の方向の変化



第47図 交流消磁による残留磁気の強度の変化

これまで保有していた残留磁気は完全に消失し、冷却後には、加熱時に獲得した熱残留磁気のみが出現する。しかし、加熱温度が575°Cよりも低いときは、それまでの磁気成分の一部が残存し、加熱時に獲得された熱残留磁気に加えられる。加熱以前の残留磁気の残存量は加熱温度が低いほど多い。上記の事柄と交流磁場の結果から、残留磁気の起源について次の結論が得られる。

1. 第45図aの円AはSK06が高温加熱によって獲得した安定な熱残留磁気の方向を示す。
2. 第45図bの円Bは未焼成岩盤の残留磁気の方向を表す。
3. 他の測定結果は次の磁気成分(a)に磁気成分(b)と(c)が付加したものであり、それゆえ、残留磁気は円A、Bの間の方向を向いている。
 - (a) 未焼成岩盤の残留磁気
 - (b) 造構焼成時の低温加熱による不安定な熱残留磁気
 - (c) 現在の地磁気による粘性残留磁気

結局、地磁気年代推定の基礎となる造構焼成時の熱残留磁気を表しているのはSK06の円A内のデータのみであることがわかった。SK10は焼成度が低いために岩盤の残留磁気がかなり残っており、そのため造構焼成時の熱残留磁気の方向を知ることができず、地磁気年代を推定できない。円A内のデータについて、平均伏角(Im)、平均偏角(Dm)、Fisherの信頼度係数(k)、95%誤差角(θ_{95})、試料数(N)を計算すると次のようになる。なお、kの値が大きいほど、また、 θ_{95} の値が小さいほど、残留磁気の測定精度がよいことを意味している。

造構	Im	Dm	k	θ_{95}	N
SK06	60.90度	-11.13度E	2244	1.41度	6

5. 地磁気年代の推定と考察

第48図は、西南日本における過去2000年間の地磁気永年変化曲線(広岡1978)⁽³⁾上に、SK06の残留磁気平均方向(+印)と誤差の範囲(点線の梢円)を記入したものである。地磁気年代を求めるには、平均方向から近い方向から近い点を永年変化曲線上に求めて、その点の年代を読みとればよい。年代誤差も同様にして推定できる。このようにして求めた地磁気年代は次のようになる。

焼土壌SK06の地磁気年代 A.D.660±30

交流消磁の結果、SK06の円A内のデータは造構焼成時の高温加熱による安定な熱残留磁気であることが確認できた。また、尾根の地盤はしっかりとしており、焼成後に傾動した形跡はない。それゆえ、ここで得られたA.D.660±30という地磁的年代は物理的に信頼度が高い。

一方、SK06焼上塙は5基の弥生時代住居跡のひとつ(SI02)の中央部に位置しているが、土層断面の観察では、SK06焼上塙はSI02住居跡が1度埋まってから後に作られていることが確認されている。また、平安時代の土器片が出土しているが、出土場所はSK06から尾根に沿って約40m離れた地

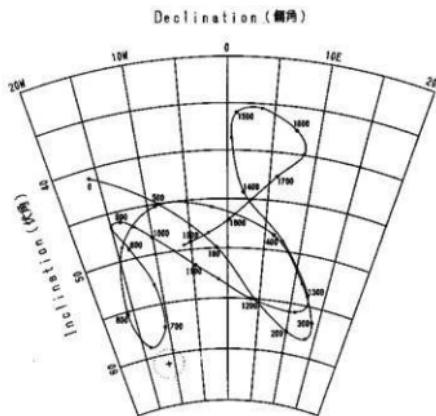
点 (SK04, SB01, SD01 の分布場所近辺) である。それゆえ、SK06について、弥生時代とも平安時代とも異なる地磁気年代 (A.D. 660±30) が得られたことに考古学上の矛盾はない。なお、丘陵の麓に分布する五反田遺跡からは、ここで得られた地磁気年代 (A.D. 660±30) と同時期の土器が多数出土している。

さらに、今までの我々の経験では、岡山、広島、島根県において、広岡による西南日本の地磁気永年変化曲線で決定した地磁気年代は考古学的年代とよく整合している。以上の考察により、A.D. 660±30という地磁気年代は信頼度の高い値であると結論できる。

最後に、試料採取にあたってお世話をなった島根県教育庁の皆様に厚く感謝します。

註

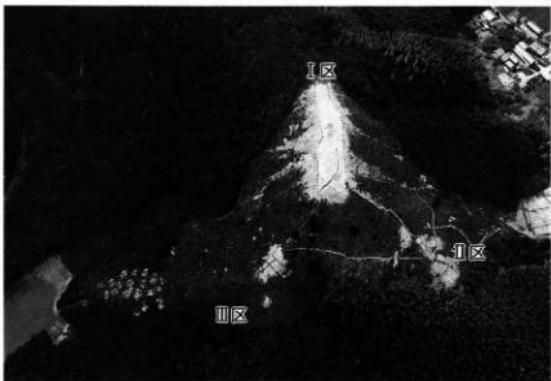
- (1) 広岡公夫 (1978)
- (2) 中島正志、夏原信義 「考古地磁気年代推定法」考古学ライブラリー9 ニューサイエンス社
- (3) 註1と同じ



第48図 焼土壙SK06の残留磁気の平均方向(十印)と誤差の範囲(点線の楕円)
および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線

図版

陽徳遺跡全景
上 I 区
右下 II 区
左下 III 区



陽徳遺跡遠景(南より)
(向こうは中海)



清水寺展望台より見た
陽徳遺跡



図版2



陽徳遺跡遠景(西より)
(向こうは大山)



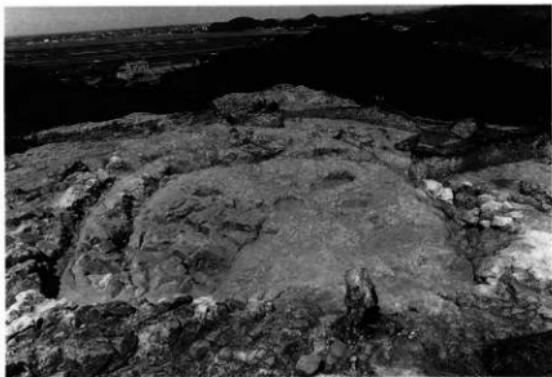
陽徳遺跡遠景(東より)



陽徳遺跡遠景
(北西下方より)



陽徳遺跡 I 区調査前
(北より)



陽徳遺跡 I 区SI01
ピット検出状況
(南西より)



陽徳遺跡 I 区SI01
完掘状況

図版4



陽徳遺跡Ⅰ区SI01
全景(上空より)



陽徳遺跡Ⅰ区SI02
土層断面(南より)



陽徳遺跡Ⅰ区SI02
ピット検出状況(北より)



陽徳遺跡Ⅰ区SI02
完掘状況(西より)



陽徳遺跡Ⅰ区SI02
(北西より)

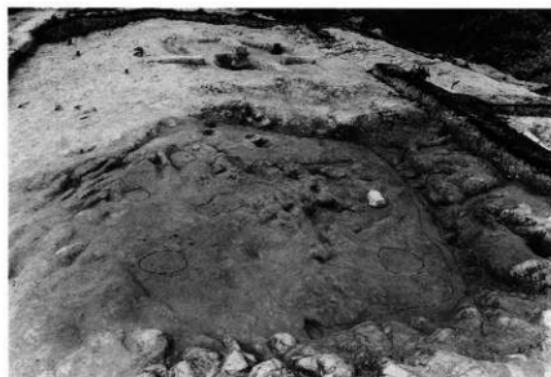


陽徳遺跡Ⅰ区SI02
(東より)

図版6



陽徳遺跡 I 区SI03
土層断面(北より)



陽徳遺跡 I 区SI03
ピット検出状況(北東より)



陽徳遺跡 I 区SI03
完掘状況(東より)

陽徳遺跡I区SI03
遺物出土状況



陽徳遺跡I区SI04
土層断面(南より)



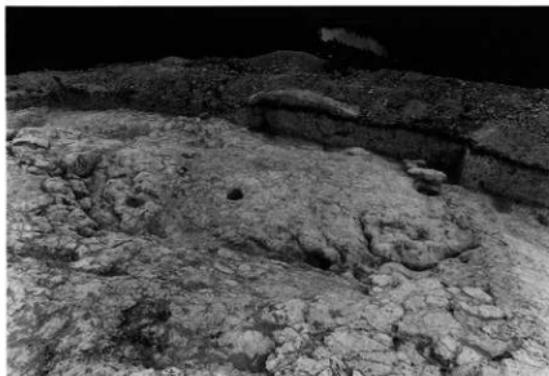
陽徳遺跡I区SI04
全景



図版8



陽徳遺跡 I 区 SI02・03・04
(上空より)



陽徳遺跡 I 区 SI05
全景(西より)



陽徳遺跡 I 区 SI05
(南より)



陽徳遺跡 I 区SK01
土層断面

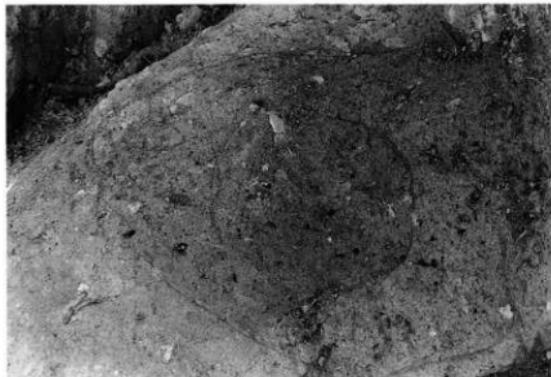


陽徳遺跡 I 区SK02
土層断面



陽徳遺跡 I 区SK02
完掘状況

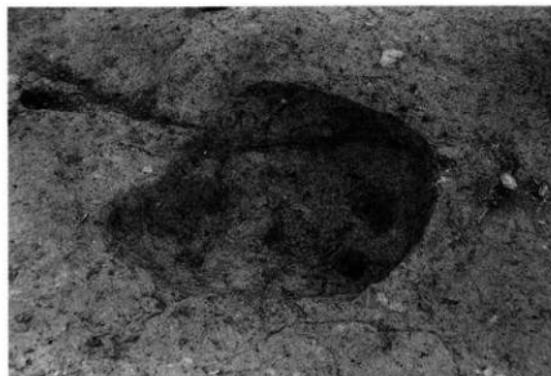
図版10



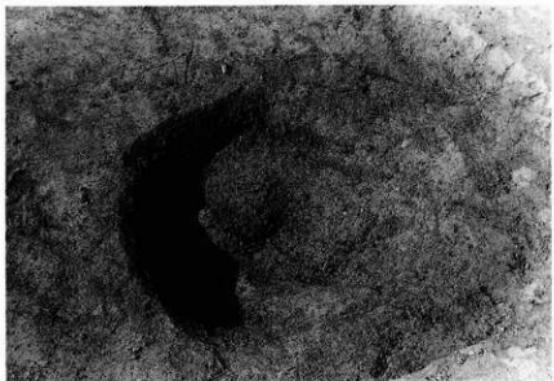
陽徳遺跡 I 区SK03
検出状況



陽徳遺跡 I 区SK05
土層断面



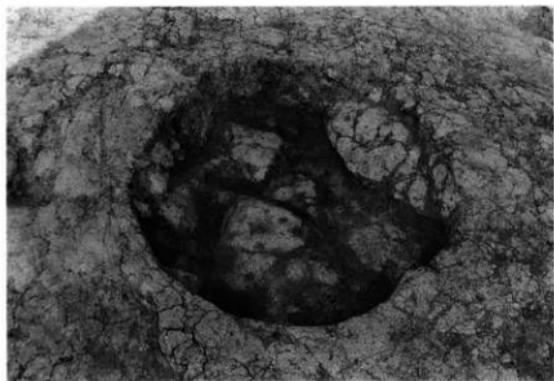
陽徳遺跡 I 区SK05
完掘状況



陽徳遺跡 I 区SK07
完掘状況



陽徳遺跡 I 区SK08
土層断面

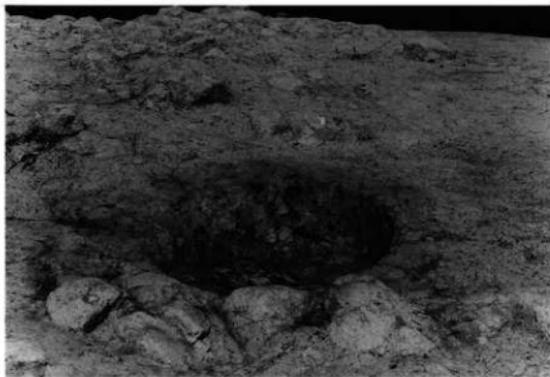


陽徳遺跡 I 区SK08
完掘状況

図版12



陽徳遺跡 I 区 SK09
土層断面



陽徳遺跡 I 区 SK09
完掘状況



陽徳遺跡 I 区 SK10
土層断面



陽徳遺跡Ⅰ区SK04
遺物出土状況



陽徳遺跡Ⅰ区SK04
完掘状況

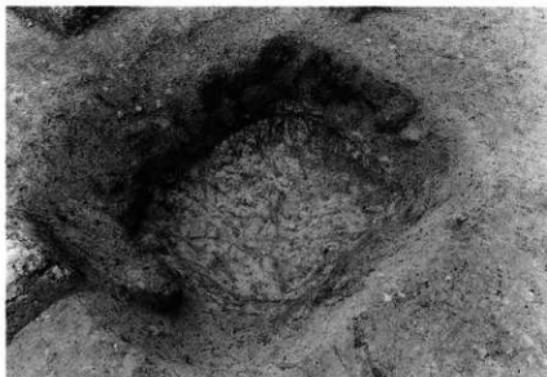


陽徳遺跡Ⅰ区SK06
土層断面

図版14



陽徳遺跡 I 区SK06
石検出状況



陽徳遺跡 I 区SK06
完掘状況



陽徳遺跡 I 区SD01
土層断面



陽徳遺跡 I 区SD01
(南より)

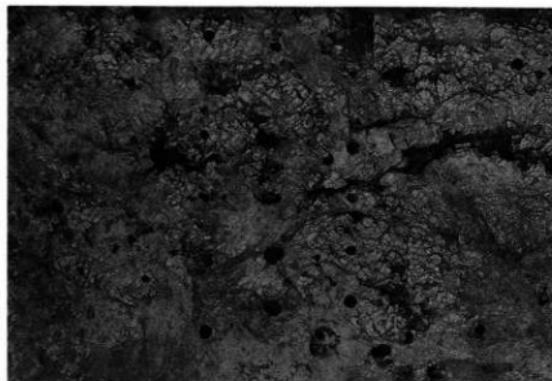


陽徳遺跡 I 区SD01
(北より)

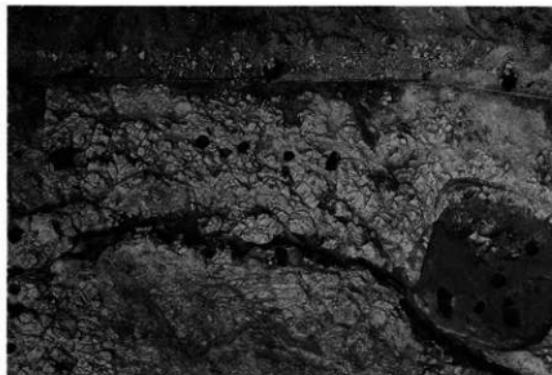


陽徳遺跡 I 区SD01
(東より)

図版16



陽徳遺跡Ⅰ区SB01
(上空より)



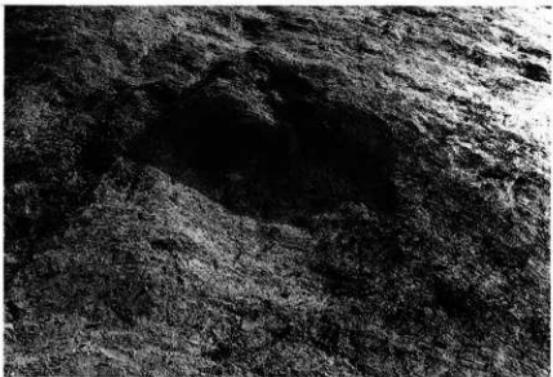
陽徳遺跡Ⅰ区SB02
(上空より)



陽徳遺跡Ⅱ区1号墳
1号壺棺検出状況



陽徳遺跡 II 区1号墳
1号壺棺



陽徳遺跡 II 区1号墳
1号壺棺除去後



陽徳遺跡 II 区1号墳
2号壺棺検出状況

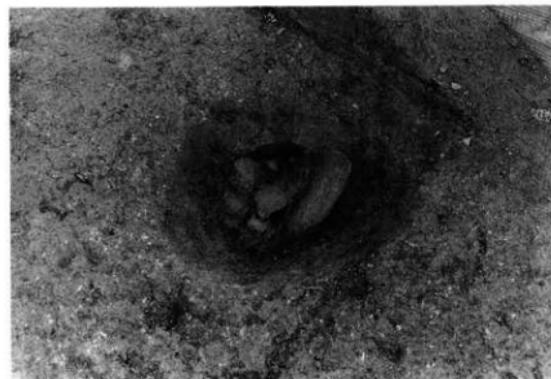
圖版18



陽德遺跡 II 区1号墳
2号壺棺



陽德遺跡 II 区1号墳
2号壺棺除去後



陽德遺跡 II 区1号墳
周溝内土器出土状况

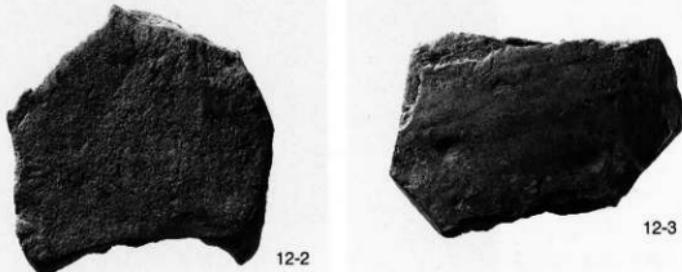
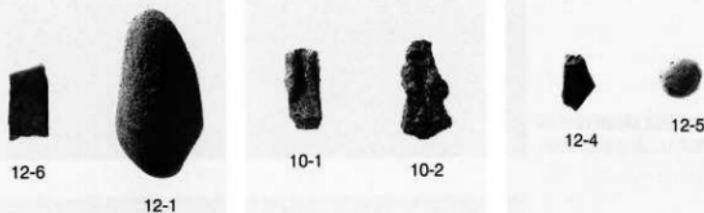
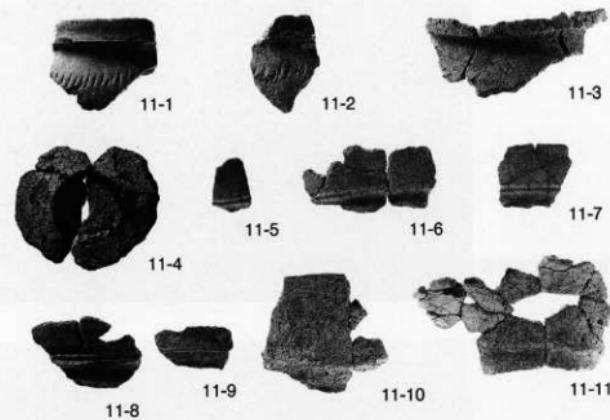
陽徳遺跡 II 区1号墳
周溝土層断面



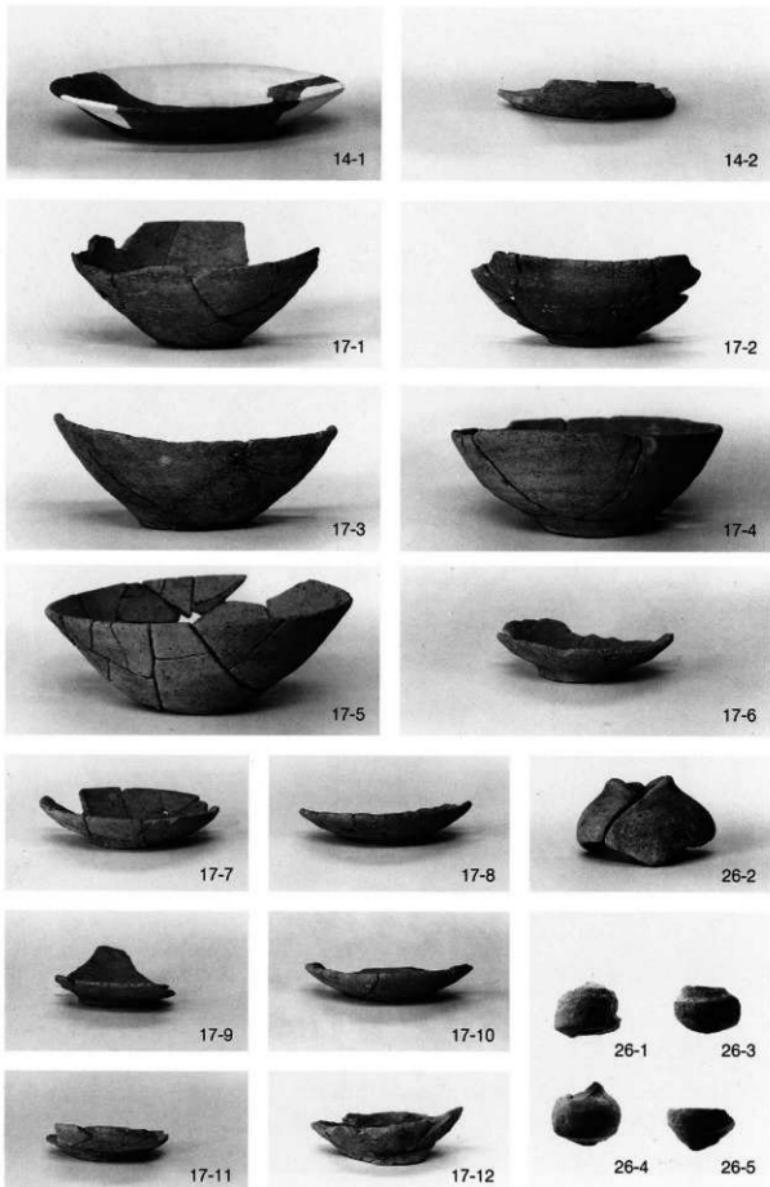
陽徳遺跡 II 区1号墳
全景(東より)



陽徳遺跡調査風景



陽徳遺跡 I 区SI01内周辺出土遺物



陽徳遺跡 I 区出土遺物 SK03(14-1・2) SK04(17-1~10) その他(17-11・12, 26-1~5)